

# 『池田町の民話』

(長野県北安曇郡池田町の民話)

千葉大学 日本文化研究会  
民話分科会編

本書は、一九八五年（昭和六〇年）十一月一日に手書き謄写版印刷の民話集『池田町の民話』（長野県北安曇郡池田町の民話）として発行された民俗調査報告書をリポジトリ公開用に活字化した覆刻版です。

本書を作成するにあたっては、あきらかな誤字脱字等を修正したほか、漢字とひらがなの使いわけ、および句読点の位置の変更等をおこなっています。また、誤読しやすい部分には、ルビ・注釈などを付け加えたほか、地名・住居表示などは、調査当時のままで表記しています。

なお、現代では不適切な表現と思われる文章表現等については、当時の執筆者および話者からの採話を尊重して、そのままの言葉遣いで掲載してあります。

## はじめに

民話。このことばを聞いて、みなさんは、どんな話を思い浮かべますか。桃太郎ですか、それとも鶴の恩返しですか。人によってそれはみな違うでしょう。では、それらの話はどのようにして知るようになったのか、思い出してください。絵本などで読んだ、学校の先生が本を読んでもくれた、紙芝居を見せてくれた。最近では、テレビを見て知ったという人も多いことでしょう。もちろん、お母さんやおばあちゃんから直接、話を聞いたという人も多いことでしょう。

私たちは、それらの中でも、直接語られたものを思い浮かべます。絵も、効果音も、特別な舞台も必要としない、話し手と聞き手がいれば、それで成立する「語り」によって語られた話を思い浮かべることができます。

この民話集は、このような語られた話を載せてあります。語られたものを文字に直すことによって「語り」の魅力をそのままお伝えすることができないのは残念ですが、語られたままの形に近い状態で文字化するよう努力しました。拙つたないものではありませんが、この民話集を読んでくださった方の中に、民話や「語り」に魅力を感じてくださる方が一人でもいらつしやるならば、私たちにあって、これほど嬉しいことはありません。

最後になりましたが、調査にあたって私たちをあたたく迎えてくださった池田町の皆様に感謝するとともに、心からお礼申しあげます。

一九八五年 爽秋の日

千葉大学日本文化研究会

民話分科会一同

## 池田町について

長野県北安曇郡池田町は、長野県の中信地方に位置して、北を大町市・八坂村、東を生坂村、南を明科町、西を穂高町・松川村の各市町村に囲まれています。

太古より人々が住みつき、今もその旧跡が発掘され、戦国時代には武将たちの注目を浴びました。そして江戸時代になると、塩の道、千国街道の宿駅として発達してきました。今でも町内には昔の家並みや升形などの面影を見ることができます。

今年には旧池田町と会染村が合併して三十周年を迎えました。三十二年には陸郷村、広津村、明科村の一部（中鶉）を加えて今の町の形を整えました。この村は、高瀬川の沖積平野上での稲作の農業が中心ですが、近年、第二次、第三次産業の比重が増しています。良米と名水に恵まれ酒造業も発達しています。

隣に大町市、穂高町があり、松本にも近い位置にありながら、あまり観光資源に恵まれず、町では大峰高原を中心とした観光開発に力を入れています。心休まる長閑な町として、再び訪れたい町と思う人は少なくないでしょう。

## 編集にあたって

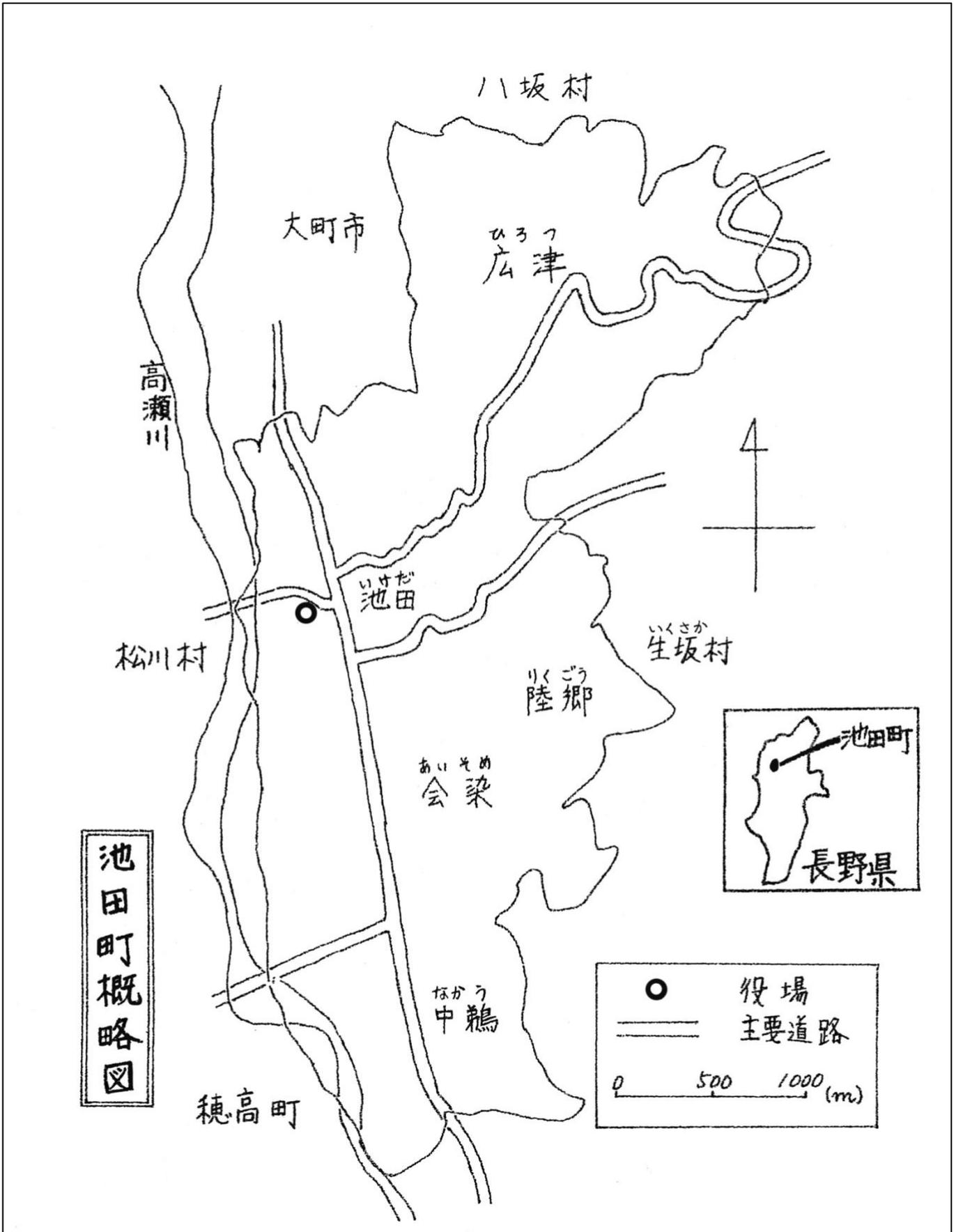
この民話集に収めた民話は、昭和六十年七月に長野県北安曇郡池田町で採話したものです。但し、四月に行った予備調査の折に採話したもので、必要と思われるものについては若干補遺として巻末に付しました。

話は、村の皆さんがお話くださるのを、直接テープレコーダーで録音し、再びテープから文字にしたものです。文字化にあたっては、できる限りテープの原音に忠実になるよう心掛けましたが、どうしても聞き取れない部分は（・・・聴き取れず・・・）と記しました。

また、分かりづらい箇所は、【補足】等を付して読者の便を図りました。なお、メモ書きによる聴き取り調査の話については、『再話』という形式であらすじを書き記してあります。

話の題名は編者が便宜的に付けたものです。配列は、採話地区と話者ごとにまとめ、従来行っていた「昔話」・「伝説」といった区別はおこないませんでした。

私たちの力不足ゆえ、誤記等もあるかと思いますが、ご了解ください。



もくじ

はじめに . . . . . 二  
池田町について . . . . . 三  
編集にあたって . . . . . 四  
池田町の概略図 . . . . . 五

【池田町の民話】

カッコ内は採話地区名

(池田町・内鎌ないがま)

登波離橋 . . . . . 一一  
継子落とし . . . . . 一一  
戸隠の水 . . . . . 一二  
丹波様の道 . . . . . 一三  
(池田町・堀越ほりこし)  
山の神様の背くらべ . . . . . 一三  
埋蔵金伝説 . . . . . 一五  
泣き岩 . . . . . 一五

おはぐろばち . . . . . 一五  
沼の伝説 . . . . . 一七  
河童の話 . . . . . 一七  
狐に化かされた話 . . . . . 一八

(池田町・平畑たいらぼたけ)

狐火 . . . . . 一九  
狐に化かされた話 . . . . . 一九

(池田町・北梅つがのおの尾)

狐火 . . . . . 二〇  
泉小太郎 . . . . . 二〇  
船をつないだ松の木 . . . . . 二〇  
狐に化かされた話① . . . . . 二一  
狐に化かされた話② . . . . . 二二  
ムジナ . . . . . 二三  
山犬 . . . . . 二三  
ずいとんぼう . . . . . 二四

(池田町・中之郷)  
なかのこう

ムジナ	二四
狐に化かされた話	二四
馬鹿むこ	二五
笠地蔵	二六
三枚の御札	二七
落人伝説	三一
長福寺の話	三二
(池田町・荻) <small>おぎ</small>	
狐火	三二
狐に化かされた話①	三三
狐に化かされた話②	三三
馬鹿むこ	三三
食わず女房	三四
猿とカニ	三六
六地蔵の由来	三八
狐に化かされた話③	三九

秋葉神社の話	四二
--------	----

(池田町・六地蔵)  
ろくじぞう

餓鬼岳の金貨	四三
四人峠	四四
六地蔵	四四
こたつ	四五
継子落とし	四五
登波離橋	四六
箸塚伝説	四六
落人伝説	五〇
狐	五一
(池田町・日影) <small>ひかげ</small>	
小太郎伝説	五四
狐火	五四
ふくろう・家の主	五五
佐々小判	五六

(池田町・平出)  
ひらいいで

狐 . . . . . 五六

(池田町・会染法道)  
あいそめほうどう

大池の話 . . . . . 五七

登波離橋 . . . . . 五七

泉小太郎 . . . . . 五八

化かされた話 . . . . . 五八

爺ヶ岳の雪形 . . . . . 六〇

桃太郎 . . . . . 六〇

家の宝 . . . . . 六一

足跡 . . . . . 六一

埋蔵金 . . . . . 六二

(池田町・林中)  
はやしなか

林中久兵衛さんの話 . . . . . 六二

八面大王 . . . . . 六九

狐に化かされた話 . . . . . 七〇

小泉小太郎 . . . . . 七一

雪形 . . . . . 七二

(池田町・堀の内)

鬼の釜 . . . . . 七二

送り狼 . . . . . 七三

おばふところ . . . . . 七三

雪形 . . . . . 七三

鬼の足跡 . . . . . 七四

種まき爺さん . . . . . 七四

仁科三湖の主 . . . . . 七四

埋蔵金 . . . . . 七四

六部の話 . . . . . 七五

鼠穴 . . . . . 七五

静御前の井戸 . . . . . 七五

滝沢 . . . . . 七五

禁作 . . . . . 七六

塚穴 . . . . . 七六

姫川 . . . . . 七六

(池田町・有明)<sup>うみよ</sup>

登波離橋① . . . . . 七七  
 登波離橋② . . . . . 七七  
 長者池 . . . . . 七八  
 中島の舟着き場 . . . . . 七八

【補遺】

(池田町・中之郷)

湖の伝説について . . . . . 七九  
 地名の話 . . . . . 七九  
 でえらぼっち . . . . . 八一

(池田町・日影)

爺ヶ岳の雪形 . . . . . 八一

(池田町・会染法道)

御岳の行者 . . . . . 八二

(池田町・堀の内)

狐火 . . . . . 八二

(池田町・堀越)

つばめと雀の話 . . . . . 八三

(池田町・平畑)

狐に化かされない方法 . . . . . 八三

(池田町・中島)

中萱嘉助の話 . . . . . 八三

(池田町・池田)

仁科氏のこと . . . . . 八四  
 安曇族のこと . . . . . 八四  
 林中久兵衛の話 . . . . . 八五  
 常光院のお薬師様 . . . . . 八五  
 ご神木の話 . . . . . 八五

(池田町・花見)<sup>けみ</sup>

狐 . . . . . 八六

(池田町・相道寺)<sup>あいどうじ</sup>

狐 . . . . . 八六

(採話地区名不明)

雪女 . . . . . 八六

有明山 . . . . . 八七

池田町の民話 (話者名と題名) . . . . . 八八

民話探訪雑感 (みちくさ) . . . . . 九三

編集後記 . . . . . 九八

分科会会員名簿 . . . . . 九八

## 【池田町の民話】

登波離橋

(池田町・内鎌)

子供がなかったので、一般のきれいな娘があつてその娘を、今で言えばお妾さんっていう意味ですけどね、それに、側室の他にその人をあげたわけなんです。あ、子供がなかったでない、子供はあつたんだけど、それであげて、うんと可愛がつて、その人の子供も生まれたね。それで可愛がつて、それでとにかくお花見だかのときに、本妻とその寵愛している奥方様の他の人と、登波離橋の上で、月見の宴だか花見の宴だかのときに舞を舞った。それでそのときに、本妻はその人が憎くてたまらない。憎くてたまらないもんで、舞を舞うとき、もう、服にこっそりと十針糸をつけて、針で縫つて、そして舞を舞った。と

ころが、自分もついてるもんで、一緒に落ちてしまつて、登波離の橋から。それで蛇になつたつて。蛇になつたつて話。そういう、だいたいがそういうあらすじ。

それで、そのお殿様は、もう、自分が悪かつたつて、お坊さんになつて、善光寺で修行して、そして、お寺に泊まつて修行した。

継子落とし

(池田町・内鎌)

ひとりのお母さんが死んじゃつて、後から来たお母さんが赤ちゃんを産んで、お母さんが死んじゃつて、で、お父さんと他の人が結婚して、その昔の赤

ちゃんのが憎くて、それで継子落として突き落とした。

## 戸隠の水

(池田町・内鎌)

雨が降ってくるね、水が高瀬川、氾濫するわけだ。それだから向こう側へ送るといふことで、お水をもらってきた例がある。それで、途中で休んじまった。それがハゼつていう・・・それは今、生坂村いんさかになつて、もとは陸郷村りくごうね、そこで休んでいたところ、そのお水がこぼれ落ちまつて、それで今もつてそれがずれてる。そういう伝説がひとつある。

それから、その樽たるの水を高瀬の川へ持ってきて流して、そして内鎌の方へ来ると、そこへ帰ってきた。

まあ、本当のひとつの信仰に基づいている。そだから、やたら持ってきてやるというわけにはいかないだよ。

戸隠から昔、歩いてね、来て、そして今もつて内鎌に戸隠の講こうというのがある、秋にね。そういうことで、まあ、ひとつの歴史がある。

そして高瀬の川っていうのはね、水はふつう常識でいえば、低い所へ流れて行く。高瀬の川の水っていうのは、高い所へ流れる。高い所へ流れる、水が。妙な川なんです。そういう、その川を相手にまあ、ずっと歴代やってきた。

丹波様の道

(池田町・内鎌)

おら方では、塩の(運ばれてくる)道を塩の道と  
いってねえ。丹波の守の道っていう、丹波様の道つ  
ていう。

それは、松本城主が池田へお城を作るっていうこ  
とであってね。御領の木があそこへ残ってるだね、  
池田に。ほだから、そこん所に作るって、殿様が通  
った道だ。ほだからおら方は、丹波の、丹波様の道  
だ。

それが塩の道の一部だ。それから、ずうっと池  
田から通ってきてね、それでおら方へ入ってくると  
丹波様の道。

そりや立派な道で残ってたぜ。

山の神様の背くらべ

(池田町・堀越)

聖山の神様と四阿山の神様が

「おら方が高い」

「おら方が高い」

と言って争ったんだって。あんたのが低い、こつち  
が高いって争いをしただって。それは伝説だからね。

そうしたら、

「どつちが高いかひとつ比べてみましょう」

ってことで、あるとき雲をね、雲をずっと平らに頂  
上から頂上へ渡して、すーっと平らにしたわけ。そ  
れで、海幸彦、山幸彦がね、水玉とか湧くったこと、  
あったでしょ、あれと同じ水玉ってのがあったんだ  
って。どういう玉か知らないけれどね。それをね、あ  
の、転がして、そして見ればどつちが低いか分かる  
だろうってことで、それを転がしただって。

そしたらね、本当はあれだって、その、聖山の方が高いんだって。だけどね、四阿山の方が自分の方を高く見せたいために、転がすときにね、ちよっとその雲をあげただって。うん、自分の方をね、高くしただと。

そうするってえと、その上に置いた水玉がコロコロ、コロコロと転んで、聖権現様の方に転んでっちゃってた。それを転んでったからね。それは水のである玉なんだね。だからこつちの方に水は全然ない。それからこつちの方はもつと水がある。聖の方はね。聖の権現様の水をもらってくると水が絶えないっていうね。

聖っていうのは今、あすこに発電所ができてね、タイラっていう発電所ができてるけど、あの山清路さんせいじろを少し下へ行った、下へ下ったところにね。これあの、名前からタイラっていうくらいだから、平らでいい所なんだね。だけどね、昔、あそこ水がなくて

ね、田んぼができなかっただ。

それでどうして水がなかったかっていうことはね、その転んでった玉をね、平の人がね、平の村の人がね、こりやいいもんが転んできたって隠しちゃっただ。しかもね、昔、着物着て袴はいたりなんか、ふつうのときは、袴はいたりなんかしてないけどね。着物着たり、それからこの辺では、もんぺって雪袴つてんだけどね、あれ、はいとった。それをつぶして隠したらしいや。こうね、バシッとやるんだけど、そうだって。伝説だからね。

そのためね、神様が怒ってそこには水をくれない。全然なかったんだ。飲むだけの水はあったけど。

埋蔵金伝説

(池田町・堀越)

ほら、あそこに、岩山見えるでしょ。あそこにね、白南天の下に、そのどこのどこの白南天があるか知らないけれども、白南天の木があつて、その下にもうたくさんのお金を埋めてあるんだつて。それでね、それを探しに昔の衆は行つたつてという話だけどね。こつちから行つたんじゃなくて、生坂いくさかの方の衆が。

泣き岩

(池田町・堀越)

泣き岩。それはね、そこに遠くから見るてえと、なんか字を書いてあるように見えるだつて。岩があつてね。

あすこは行つてみると、怖ろしい所でね。百メー

トルくらい絶壁でね。本当に絶壁でね。やつたつて、よじ登つたり、その下りられるなんてもんじゃねえだ。その人がね、なんとかしてそれ、下りようと思つてね、それで、あの、縄を伝つてね、下りてつただつて。そうしたところが、その縄が外れちまつたかなんかしてね、そこに下りたはいいがさ、下にも下りられねえ、上にも登れねえ。それで、それで、そこで泣いて死んだつて。

おはぐるばち

(池田町・堀越)

六地蔵つて村があるが、ちよつと奥入つた所に荻おぎつていう部落があつてね、ここに四軒ばかりあるけ

れど、あの所に秋葉神社が、お宮があるんだがね、ほんであの、秋葉神社のずーつと下の、あの、こう砂岩の岩が露出しておってね、そこにあの、動物の伝説がある。

それで穴、いくつもあいててね、ふうしよく風蝕でもってあいたと思うがね・・・

よく川底なんか水でもってあいたのがあるがね、かなり。どっか天然記念物になったところもあったけれど。

それで、そういうのがそこにちょうど五、六カ所くらいあったかな。そこに、あのね、おはぐるぼちっという魔物が棲んでおっただ。おはぐるぼち。おはぐるっていうのは、昔、おはぐるをつける鉢があった、ほら、丸い、黒い、ね。(採話中の女子学生達のこと)姉ちゃんたちは知ってるかどうか知んねえけど、おはぐるっていうのは、おばあさんたちはね、昔、結婚するってえと、眉毛おとしてさ、その仮親になる人は『かね』(鉄漿)やってね、おは

ぐるのことをかね、かねを付けるって昔の言葉にあるけど。【かねてつじょう鉄漿お歯黒にする黒色染料のこと】おはぐるぼちってのがいただって。それがあるときにその、あその山崎さんっていう家の先祖のひとりが通ったら、それ足に絡みついて困っただって。

それから、今でも使ってるけど、背負子しよいこってねえ、あるだね。それで、それあの荷しよったまま休む杖があるわけ。鍬のように、こう、かぎ型になったね。それね杖でもって追っ払ったって。そしたら、それ、川の中逃げてったってね。

そしたら、それ家へ来ていたずらをして困っただって。夜分にあがって、いたずらするとか。うちのひさし庇の所入って、いたずらするとかね。それで今度それをよけるために京都まで行って、京都の秋葉神社行って、そしてその秋葉様をかんじょう勧請して来て、あっこのお宮へ、神社へ祀っただって。

## 沼の伝説

(池田町・堀越)

ほとんど沼地みたくなつてね、水はいくらもないけど、あそこに大きな池があつてね。これ、昔、湖水つてこともないけれど、湖水に近いくらいに大きな池があつただ。今でも跡があるけどね。そこに、やはり主だ<sup>ぬし</sup>。大きな蛇が棲んでいてね、棲んでいたんだつて。それでね、これを殺した人があるだよ。池田に。その人は木こりでもつてね、そしてあの、木こりになつてあそこ行つたと。薪だかなんか積んであつた上に、大きな怖ろしい大きな蛇がいたんだつて。それが、その主だ。それをマサカリでもつてね、切り殺しただつて。ちようど八岐大蛇<sup>やまたのおろち</sup>を須佐之男命<sup>すさのおのみこと</sup>が切つたようにね。そうしたらね、そいであの昼間の日の雨つてね、日中晴天のうちに雨がザーツときて

ね、それから家へ帰つたら、そのまま病みついて死んでしまつたつてね。そういう伝説がある。それから、あそのこの水がなくなつた。

## 河童<sup>かっぱ</sup>の話

(池田町・堀越)

河童の形、姿まで聞いていないから分からないんだけどね、昔、馬をどこの家でも飼つとつてね、農作業に使うためにね。それでよく川行つちやあ・・・馬を洗つてくれたわけだね。そしたらね、うちへね、洗つて引いてきてね、馬屋へ入れたらね、馬のしっぽへつかまつてね、(河童が)うちへついてきてしまつたわけだ、ぶら下がつて。その家の人は知らなくて、それである、うちに中へ来ちまつてね、馬屋の中

を見たら、その隅に河童がかたまってるだつて。丸まつて。それから、あの、ませ棒(馬冊)つてのがあるだ。馬屋の入口に渡しておく。それでもつて、殴つてやつたら、そしたら是非助けてくれつたけどね。

河童が頼んで謝つて、助けてくれれば、このうちは将来、川でいっくら泳いでも、川へ遊び行つても、子供が遊び行つてもなにしても、川でもつて事故は起こさせない。そういう約束をしたつて。それでそのうちは一回も川流れという事故はなかつた。

狐に化かされた話

(池田町・堀越)

八坂やさかの村のうち入るつてえとね、あの金熊川かなくまの沿線のところにオオマンバタケつていう所があつてね。

そこに、あの、昔つから狐がたくさんいてね、それでいつも人を化かしたそうだ。

そばの村にね。昔はよく畑の所にね、肥溜こえだめを作つてあつてね、今は化学肥料でやるけどね、昔はなかつたから、それを畑にかけたり、それから草を摘んだり、ま(厩肥)や(厩肥)ごえね、たい(堆肥)き(厩肥)ゆう(厩肥)ひつてのを使つたわけ。

あるとき、あすこにね、宮島つて神主があつた。その、あの、肥溜めの中へ入つてね、それから他の人が通つたときに驚いて聞いたらね、

「いやあ、いいおかんでもつて風呂入つてる」  
つて。お風呂に入つていいおかんだつて言つて入つてたつて。それから、その後、神主の位(落ち)がおつちやつてね。入つちやいけないだつて。そういう話がある。

あそこの狐はね。

## 狐火

(池田町・平畑たいらばたけ)

狐火っていうのは、ちよいちよいとあつたがね。この、うちで見ると向こう側の桃の木つてのがあつて、そのつぎが塩股っていうのがこの尾根境いに尾根にこうなつて、そここのところの沢のところね、ちやかちやかちやかちやかと点いたり消えたりして、十くらいずつと点いちやまた消えたり、それでまた三つくらい点いて戻ったりすることは子どもの時分に見たがね。そういうことは何回もありました。そりゃあ、ちようど夕方のね、まあ、ちよいつと子守をして遊びすぎた頃とかね。それからあの、十時ころ小便まつて寝るなんていう頃にね。雪の降つたときには。

## 狐に化かされた話

(池田町・平畑)

(地名?)ハ<sup>ン</sup>ダの衆はちよいちよいと、まあ人間がやったものか狐がやったものか知らないけれど、馬に、あの、町から油揚げなんかね、あの、今で言う揚げつていうのを買って、そしてつけてくるといふと、野郎、いつの間に登りあがつたか分からねえが・・・旧道つてのはまだ上にあるもんで、その山の中を通つて帰ってくるつてえと、この馬の背中があつて、それで、それを盗られちゃつたつてことは聞いているわね。そいで気がついて見たら、野郎ずーつと飛び降りちゃつたなんて、そんなことはあつたつてことは人と話したがね。

ま、今夜も野郎にやられちゃつたなんてことはね。そういうことは俺らもあつたわね。大正時分にね。

## 狐火

(池田町・北梅の尾<sup>つがのお</sup>)

おらの子供の時分には向こうの足沼の方に、提灯<sup>ちようちん</sup>をつけたように二つになったり、十になったり、二十になったりなんていうよな。ああいうことはどういふことだか分からねえが、結局あれは、狐っていうのはしっぽが光るだっていうだ。で、それを振るために光が<sup>(見)</sup>めえるでねえかな。二、三匹から四、五匹も集まってくりやあ、それが行列のようになるだ。

泉小太郎

(池田町・北梅の尾)

昔、松本平<sup>まつもとたいら</sup>は湖だったって。それを山清路<sup>さんせいじ</sup>という

とこの岩のある高い山があった。それを泉小太郎がサイに乗って山清路の岩を切り開いたっていうだ。それで犀川<sup>さいがわ</sup>っていう名をつけただっていうだ。それでこの松本平の水がなくなって、それでいい盆地ができただっていうだ。

船をつないだ松の木

(池田町・北梅の尾)

昔、池田からこの付近は海だったということ、船をつないだ松の木とかっていうのが、今現在、半在家<sup>はんざいかい</sup>からちよつと北に上ったところにあるわけだ。船着き場でもって船をつないだ松が。ま、そんなよくなことで、大町へ行く途中のそこにもあったって。そこにも松があるわけだ。

狐に化かされた話①

(池田町・北梅の尾)

足沼っていうところに、しゃかんどがあつて、その人がこの向こうの寺間っていう部落へ頼まれて行った。そうして御神酒をごちそうになって、まず夜の十時、あ、十時半ごろか、提灯をつけて、向こうの部落から沢へ降りて、向こうのね、尾根を登って。提灯をつけて。そうしてそこから尾根登りきるまでに途中でちよつと、その酒飲んだ勢いで、たばこ一服吸つたらしいがね。ま、それでその、狐に化かされたって。

それで今度は、あの上の上っぱずれに登って。もう提灯が消されたって。まあ昔ではよく、狐にろうそくを盗られたりとかつて、消されたって。ま、それでその人は提灯を消されたかどうか暗くて、その上

っぱずれ、ま、現在は道があるが、そこまで道を間違えて、ずーつと入って来ちまっただよ。

そうしてちようど、俺がこの部屋に、親父と、親父は足を怪我してて寝てて、それで親父と寝ておつた。おじっさまはこつちで休んだ。それで夜十二時ごろになったら向こうっぱたから、このおらんちの、おらのうちは今は電気だが、昔はランプをつけて、二燭にしほくって小せえこランプをつけて毎晩おいただで、それを見て、そのランプの光を見て、向こうでもつて、おらんちの親父さんの名前を呼ばうわけ。それでもう、

「だれか、おい、俺の名前を呼んでる。出ておなきや」

って。それから、俺んちのおじっさまが庭に出て見る。だけど、どうも暗くて分からない。呼ばうことはどっか向こうで、その呼ばうども、どこにいたただかね。分からねえで。それで、

「だれだ」

って言ったところが、

「おらあ、足沼のしゃかんどだが、道を間違ったんだか、こんなところ入っちゃまったが」

そだが、どこにいるか分からない。で、

「しゃかんど、提灯持ってるか」

って言ったたら、提灯持ってたって、やっぱり。で、

「提灯使え」

って、提灯つけさして。それからその明かりを目あてで、俺たちのおじっさまがこの道下って、だいぶ向こうへまわって山を降りてってね。そしてつりあげて来た。そうしてみたら、もう体中泥だらけ。どこぞ歩いたか。それが本当、狐に化かされたって。

## 狐に化かされた話②

(池田町・北梅の尾)

うちのじっさまも一回、狐にやられただよ。

これは、まあ、夕方。ちようど二月。昔は旧でやったがね、二月十七日。おらたちは職人だったんで、十七日にお祝いをやった。それで池田町へ、みんな昔は買い行っただ。米からごちそうから。それでうちのおじっさまが池田へ買い物に行って、米を一斗五升買って、それから揚げ豆腐ね、揚げ豆腐二枚買って、かますのところへぐるぐるうつと巻いて、しよって来たわけだ。

それでずっと向こうの、今の大峰へ入ってきたが、そこでもってどうやったって、動けなくなっちゃつて。まあ、狐がおわったってことだね。揚げ豆腐盗るために。それでどうやったって、じっさま動けなく

なっちゃって。どうにもならなくて、町から来る人に頼んで、おらのうち呼ばってもらって。

それで、うちの親父が今度には行ったが、なにしろ、雪がおめえ、二尺五寸くらいたまっちゃって、足がズルズル。おぶって来ても。そしたらね、狐に化かされたときは顔隠しちゃう、本当に。こうやって。狐に化かされたときは、顔出さねえ。寝かせても顔隠したまま。

ムジナ

(池田町・北梅の尾)

ムジナも、その古いたった偉いやつは、おらも子供時分にはよく聞いたが、木を切る音やるだよ。しっぽで。しっぽでもって、木持ってって、ゴイゴイゴ

イゴイやったって。それでしっぽをぴたつとやるときに、その音が木を転がす音に聞こえるだよ。

山犬

(池田町・北梅の尾)

蕎麦<sup>そば</sup>をこしたり、煮かけをこしたり、大ごちそうこして持つってね、山犬が子供生まれたら。そしてたらお祝いして、そこへ持つって、呼ばってくれとけば、山犬は食いつかねえとかってね。

ずいとんぼう

(池田町・北梅の尾)

あの、学問やっただね、お寺で。夜学やってって。そして和尚さんがね、村の若い衆を集めてね、そして学問したら、その雨戸へせ、雨戸毎晩のように、「ずいとんぼう、ずいとんぼう」って。何がってまあ、一週間くらい。夜になりや習う人が集まってくりやせ。したらそういうふう、「ずいとんぼう、ずいとんぼう」って音するで。

一週間ばかり経ったら、あんまり音するもんで、それからその雨戸パタンと大勢でもってはいだら、狸が逃げたってね。

それっきりやらないんだって、「ずいとんぼう」って。

ムジナ

(池田町・中之郷なかのごう)

冬、蚕の繭から糸引いて、それで機織はたったわけ。それでその糸引いたのを、夜、杵へ繰り返すわけ。カラカラカラカラとね。そうしちゃあ、その音をね、まねるだよ。カラカラカラカラ本当に上手にまねるだよ。

「またムジナが来てやってる」  
って、おつかさんが言ったけどね。

狐に化かされた話

(池田町・中之郷)

(・・・聴き取れず・・・)おじいさんがお酒好きだ

もんで、いつとう昔は、あの日雇いやつててね、よその仕事してるでしよ、日雇いつていうのはね。一升入る缶からを提げて、お酒を入れて、それで仕事に行ったわけ。そんでね、そのおじいさんが有明うみよの方へ行ってね、お酒飲んで、おみやげに肉だか何だか、こうやつて提げて来たつて。

もう堤防に出てもいいころだと思つたつて、どうやつたつて着かねえの。さんざん歩いたわけ。これはどうかしてると思つて。気がつきやいいけどね、気がつかなきや、酔つてるでね。それで気がついたもんで、座つてね。たばこを吸つたつて。そうしたらね、同じこの藪の（・・・聴き取れず・・・）中をぐるぐると回つてたつて。そして持つてるのはボロボロだったつて。それで、やつと向こうが見えて帰つて来たつて。

馬鹿むこ

（池田町・中之郷）

馬鹿なむこがあつて、お嫁さんの家へ行つて、そしてお団子作つてもらつて、それが美味おいしかったつて。

そしたら帰りになつて川を飛び越したら、

「どっこいしよ」

つて飛び越したら、「どっこいしよ」になつちやつてね、その「お団子」というのを忘れちゃつて。それからうち帰つて、

「どっこいしよ作つてくれ」

そう言つたつて。「どっこいしよ」が分からないでしよう、お嫁さんはね。そうしたら、

「どうしてもそれが分からない。おめえのうち行って大おおごちそうなつて来た」

って。

いろんなこと言ったって、「どっこいしょ」が分からない。そうしたら、怒って暴力ふるって。そしたら瘤こぶが、たんこぶができたって、お嫁さんの頭に。そして、

「お、それだ」  
って。

## 笠地藏

(池田町・中之郷)

笠が売れないんだもんで、帰りに、田んぼの道に来たら、お地藏様がいて、雪だらけになっていたもんで、笠を一つづつかぶしてきたって。だけど、おばあさんが欲しいお餅は買えなんだしね。欲しいもの、

何も買えなただけど。ま、ひとつのお地藏様は笠が足りなだもんで、自分のかぶってたのをやってきてね。

それからうち来て、おばあちゃんにそのことを言った。

「売れたか」

っておばあちゃんが聞いたけど、

「おと一人でもって、みんな他のものを欲しがって笠売れなんだ。だけどね、帰ってきたら田んぼの中のお地藏様が、あんまり寒そうでかわいそうだったもんで、笠をくれてきた」

って。そしたら、

「おじいちゃん、よっぽどいいことしたねえ。私は食べなんでもいいで。これでお茶飲んで寝ましょ」  
って寝たって。

そしたら、夜中に遠くの方でね、小さい音して言うの。

「よーいしよ、こーらしよ」

それを黙って聞いているわけよ。そしてその声がだんだん大きくなって。はじめは何だか分からなかったね。その、よーいしよ、こーらしよってのが。だんだんそばに来たら、

「よーいしよ、こーらしよ」

ってのが分かるようになった。そうしたら何か来たって、おじいちゃんとおばあちゃんと怖くなって、二人でこう寄り添ってね、だまあつて聞いてた。もしたら、その声がだんだんうちに近くなって、もう怖くなって。そうしたら、うちのそばまで来たら、その声がね、びたつと止まった。もしたら、

「ほんとにね、どうも昼間はありがとね」

って声がしたって。そして何か、ドスンとね。子供が飛び上がるほど、ドスンで。

「ひゃあ」

って二人は言うわけ。そして、おじいちゃんとおばあちゃんがびっくりしちやって。何かドスンっていったでね。二人でこう抱き合って、

「何だろうね」

って言うわけ。

そのうちね、だんだん声がしなくなったわけ。そつと二人で起きて覗いてみたの、おもてにねえ。それはいろいろなもの、いっぱいあったのよっていうだ。

### 三枚の御札おふだ

(池田町・中之郷)

あるお寺に、小僧さんとお坊さんがおって、そして裏山の栗が秋になると、ポツンポツン落ち始める。

小僧さんはその栗を拾い行きたくて拾い行きたくて、困るけれど、和尚様は、

「あの山は行っちゃだめだ」  
「あの山は行っちゃだめだ」  
ってね。

「あの山の奥には、怖ろしい鬼婆おにばばがいるから、栗拾い行っちゃだめだ」

って言うけど、どうしても小僧さんは栗拾い行きたくて。  
いわけ。

「どうしても行きたいから、和尚さん頼む」  
そしたら、

「栗拾い行っても奥には入っちゃいけない」  
とね。

「山のふちだけで拾って帰ってこい。もし何かあったら、この三枚の御札おふだを使え」  
って、三枚の御札を持たしてやった。

そしたら、栗拾っていると、夢中になって拾ってだんだん奥へ入って行っちゃって。それで気がつい

たら、おばあちゃんがそばにいて、

「小僧や、たくさん拾えたかな」

って言うわけ。ね、そのおばあちゃんが。そしたらびつくりしてね。ちよつと声が出ないわけ。それから、

「うちへ来ないか。栗がたんとなつて、美味しいの煮であるからあげるよ、おいで」

って言うから、もう小僧さんはね、何かこう怖いけれど、おばあちゃんについて行っちゃうわけ。

そしたら、うゆででた栗があつて、それをたらふくごちそうになつて、眠くなつて、寝ちゃうわけ。そしたら、あ（雨落ち）まおちの音が小僧さんに、

「起きて、目を開けて見とけ」

って、こう聞こえるだ。そして、目を開いて見たら、あのおばあちゃんがね、まるつきり変わつてるでしょ。さ、怖くなつちゃって、これが和尚さんの言った鬼婆だと思つたけど、逃げるわけに行かない。だから、

「お便所行きたい」

「つたら、

「お便所そこでしろ」

「そんな所じゃできない」

「そしたら、お便所行けって言わないの。そのおば

あちゃんが。だけど、

「どうでもお便所行きたい」

「つて。

「それじゃ行け」

「つて。おばあちゃんが縄をつけて、お便所へやるわ

けね。そうしたら、どうかして逃げっと思ってるも

んで、

「小僧や、まだか」

「つて言う。」

「まだだよ」

「つて言う。」

「小僧、まだか」

「つてまた聞く。」

「まだだよ」

「つて言う。今度は御札をしばって。縄をほどいてね。」

「そして、御札に代わりさせて窓から逃げるわけ。そ

して御札が答えてくれるわけ。おばあちゃんが、

「まだかあ、まだかあ」

「つて言うのに。」

「あんまり来ないんで、不思議がつておばあちゃん  
見に行ったら、御札がしゃべってる。」

「小僧逃げたな」

「つて言つて、その鬼婆が、おばあちゃんがね、後を追

いかけるわけ。小僧の足はこんなで、おばあちゃん

の足はこんなに大きいでしょ。じき追いついちやう

わけ。」

「それから、一番はじめに、もう手がとどきそうに

なったとき、小僧さんがもう一枚の御札を出して、

「砂山になれ」

って投げた。そうしたら砂山ができてね。その前に小僧さん（・・・聴き取れず・・・）鬼婆は砂山を登ろうと思うと、ザーツと滑っちゃうもんで、それをうんと苦労して登っている間に遠くに逃げられちゃうわけ。

そうしたらその砂山を越えて今度は、またじきに追いつかれそうになって、もう一枚の御札で、今度

は、  
「大きな川になれー」  
って投げるわけ。それで、鬼婆がその川を渡ってる間に、お寺に逃げ込む。

それで和尚さんを起こして。和尚さんはその小僧さんをつづらに入れて天井まで吊り上げちゃうわけ。そこへ鬼婆が来て、

「小僧来なかったか」  
って。そしたら和尚さんが、  
「小僧は来ないけど」

で、お餅を焼いてたわけ。そしたら、

「そのお餅をわしにくれんか」  
ってね。そしたら、

「化けくらべをしよう」  
って、和尚さんが。それで和尚さんが念仏を唱えて。それであれがだんだん小さくなるわけ。で、和尚さんが、

「もっと小さくなれないだろう」  
って言ったら、鬼婆は、

「そんなのなれる」  
って。だんだん小さくなって、豆粒くらいになったとこ、和尚さんが取って食べちゃった。

落人伝説

(池田町・中之郷)

広津の・・・中沢さんから聞いて来たね？・・・あそこ・・・おもしろいよ、西南の役つていうでしょ、知ってるかねえ。明治十年の、西郷隆盛があのときに奮闘をした方の大隊長の大勇士、別府晋介って人が、その人がこの広津まで逃げてきたって話が残ってるんだよ。(・・・聴き取れず・・・)山の中に、この一、本当じゃないと思うよ、しかし何かどうも関係がある人が来たらしくて・・・からだ中が傷だらけの人がやって来たとか・・・ただし別府晋介じゃなくて別府きよゆきとかいった、別府に関係のある人が(・・・聴き取れず・・・)最近の伝説まであるんだね、百年前のだね・・・それから広津にいる北条さんなんていう人たちは、北条氏の子孫なんていつてあるんだが、北条氏が逃

げたあげくには、広津の山の中の谷あいには、中に逃げ込んだっていう、だって平家の落人ってことじゃない？そしたらね、平家の落人と源氏の落人と両方ある、それもおかしいことだ、まっ対な両方がね・・・北条・・・北条氏は、どっちなのか、源氏か・・・そしてしばらく落ち着いて、隣の村と話してみたら、隣の村は平家だったって。そしたらこりやどうももう、お付き合いできないと、結婚はできない、まかりならぬということ、結婚しない。

結婚が始まったのは最近だ。そういうおもしろい伝説がこの中に残っている。山の中っていうのは、特別な、そういう伝説がでてくるね。そんなことがあって、北、北条氏だって、北条氏ってのはまた捕まえられて処罰されるから、名前を変えて、北条と書いて、きたじょうと読ませる、きたじょうさん、その人は後には庄屋になって大した財産をこしらえたとか・・・

長福寺の話

(池田町・中之郷)

実際には、ちよつと違うらしいんだがね、伝説の方だから・・・

殿様が鷹狩りに来た鷹が、追われて長福寺の中へ入った。そういう話、しやしなかった？

お坊さんが、生類、命のあるものを殺させることは俺にはできない。私にはできませんよ。だから、入っちゃいけないと言って、入れなかったんだね。それで、殿様が寺の中は、なるほど坊主の領地に違くない、それでも周りはみんな俺の領地だと言ってそれで、庭に家来をおいて、いっさい土地の人や何か中に入れさせないようにして坊主も外へ出させない。そんなもんだから、坊主はついに（・・・聴き取れず・・・）そしたら、隣にいた庄屋が、今度、こっそりと食べ物をお届けした。そしたら、それが分かってしまつて、

今度は庄屋が罰を被つたと。

辞めるかたちになつたというんだけど、実際はそうではないんだけど、罰を受けた、ということになつて、そのあと、坊さんは耐えられなくなって、生坂いくさかの方のお寺に逃げてね、そういうことになつてね。

そしてそのあと、またたどりたどつて福島県に（その坊様がね）長福寺を建てたそうだ。

狐火

(池田町・萩おぎ)

おらの子供時分まではね、狐つてやつあ、火をつけちゃあ歩くで分かるだ。狐の灯籠とうろうぞろいだ、なんて言つて、おれはこつちで見たことがあるだね。それはね、最初はひとつつきりしかないだ。火が。その

次に二つになら、三つになり、しまいには二十から三十も、ずっと並んでついてくだね。

狐に化かされた話②

(池田町・荻)

狐に化かされた話①

(池田町・荻)

昔は、狐は朧おぼろ月夜には必ず誰か化かしたって。人間の持つてるものが欲しいのか、油揚げ豆腐とか、油っこいもの持つてりや、その匂いを嗅ぎつけちやあ、ついて歩いちやあ、提灯持つてると、ついて歩いちやあ、ろうそくをみなとって食っちまう。狐が。

下のそうまさの家うちで、木を削って乾かしときやあ、そこへ化かした人を連れてって、その木の間のところに入れといて、馬糞やそういうのを拾ってきちやあ、目の前へ並べて食べさせたり、そういうことやったって。

馬鹿むこ

(池田町・荻)

昔、馬鹿なむこに、嫁様もらってきた。その嫁様のうちじゃあ、いい馬買ったって言うが、それを褒めに行きやあ、馬を見せるが、これはいい馬だって、

そうやって褒めてりやいいって。ああでもない、こ  
うでもないって言っていないで、黙ってなくちやいけ  
ないって教わって、向こうへ行ったら、教わったこ  
と忘れちゃって。

「兄さん、今度馬買ったが見てくんねえかい」

「そうかい。それはまあ、見せてごらん」

って。それで引き出して馬を見せた。

「これはいい馬だねえ。けっこうな馬だ」

って。最初は褒めたって。

そしたら、あそこへ仏壇もこしたで、仏壇へ、

「いい仏壇こしてあるけれども、惜しいことにひと  
つ節穴がある。これは仏壇だで、他のもの貼るわけ  
にいかねえで、善光寺様の御札でも貼つとけばいい  
わね」

って。

「こりゃあいいむこだ。利口なむこだ。馬見てくれ」  
ってんで、馬見たら、

「こりゃあ、けっこうな馬だ」

って。そしてさんざん馬を見て回って、しめえに行  
ってしっぽ持ち上げたら、ケツの穴があつたって。

「こりゃあ惜しい馬だ。この穴あるの、善光寺の御  
札貼ればいい」

って。

「こんな馬鹿にお母ちゃんくつつけとくと、何する  
かわからねえ。とつちまえ」

ってとられちゃったって。

食わず女房

(池田町・萩)

このアルプス、西山にしやまがこの西の方にあるでね。西  
山から鬼が来るって言ったりね。五月の節句のとき

には、昔はきれいな女の鬼が女に化けて来る。

「おれは食べ物を食べないで仕事をしてやる。それでうちに置いて使ってくれ」

って来たって。そりゃあ、食べ物食べないで仕事してくれるのはいいね。それで、やってみろっていう話になってね。それで頼んでおいたら、そうやって飯食わないで、仕事を人の何倍もやる。

それで、置いといたら、そんなに人間でものは仕事ばかりして、食べ物食べないでいられるかって。

それで亭主が町に出る支度したくをして、それで町に行かないで、そのうちの梁はりの高い所に上って見てた。そうしたら、なるほど大きな釜に火を焚きつけて、ご飯をぐつぐつよく煮た。それで、ご飯をどうするかと思って上で見てたら、黙って見てたら、頭をわんわんと分けて、頭へ、頭の真ん中へ大きなしゃもじ持ってきて、ふいってそのご飯吸い込む。頭の真ん中に穴あいていて、そこへふいって吸い込む。

これはおっかなくなっちゃって、こんなところにいられるかと思つてたら、それは魔物なんで、人の気に感づいて、

「おれの正体見たで、ただじゃおかない」

ってわけで黙って下りてきたって。そしたら、

「おれの言うものをこっちに寄せろ」

って。そしてはんぎり、はんぎりって桶の深さが一尺五寸ばかりあつて、直径が二尺五寸もある、でかいはんぎり、それをしょって、それを頭の上へ乗せて、そして、そのうちの亭主ってやつをしょいこんで、はんぎりの中しよいこんで、そして西山の方へどんどんまっしぐら。

それで、これは鬼に連れて行かれて食われちゃうって一所懸命もがいて、ここらで落ちていいと思つて、這はい出して下へすとんと落ちたって。そしたら、よもぎや菖蒲しよぶがいっぱい生えている沼へ落ちたって。

そして、女鬼は向こうへ着いてみたら、亭主がいなくてガラーンとしてるから、落としたろうって、あわてて拾いに行つて、来たつて。そしたら、よもぎと菖蒲の中にいた。

「これはどうしたつて、俺はよもぎと菖蒲の匂いでもつて中へ入れねえ」

つて。それで帰つてつたつて。

ちようどそれが五月五日の日で、ここでは昔から、よもぎと菖蒲を屋根の棒に差して、そしてお節句を祝つたものです。

猿とカニ

(池田町・萩)

猿とカニは最初、仲がよかつたのかなあ、カニと

猿が遊んで歩いてて、猿は柿の種を拾う。カニは握り飯を拾った。猿の方はそれが欲しかったで、カニをだまくらかして握り飯をとつて、自分で食つちまつて。

「これを植えといて、柿をならせろ。柿がなりやあ、俺がまた来て採つてやる」

つてだまして、柿の種を猿がカニにやつて、それでカニは一所懸命植えて、水を毎日のようにやつて、わけなく出てきて大きくなって、柿がなるようになったつて。

そしたら、やっぱり向こうの山から、柿が柔らかく実つたんで、猿が見つけて採りに来た。そして、

「柿が赤くなつたんで、採つてくれる」

つて登つて、一生懸命採つて、てめえでぐしやぐしやぐしやぐしや食つちや下へ落としてる。

「俺がせつかくならしたのに、食い散らかしにしないで、俺にも甘いやつひとつ採つてよこしてくれよ」

って。それで最初は青い、赤くねえ渋いやつよつちやあ投げて。

「これは渋くていけねえや。もっと赤いやつを採ってくれや」

って。そしたら、

「今度は甘いやつやるぞ」

って。甘いのをやるときは、カニをめがけて、柿を上からパシーンと投げてやる。最初は当たらんのだ。

そのうちコチンとカニに当たったら、カニがつぶれちゃって。中から子ガニがいっぱい出てきた。

それで子ガニが泣いていたら、仲間の人が、

「何で泣くだ」

って。それで、

「猿に柿をぶつけられて傷になった」

って言う。それで仲間が寄って。カニに臼うす、それから蜂はちも仲間になって。栗も来たって。みんなでカニをなだめて、それで仇討かたきうちやることになった。

それで、まあ今日は寒くなってきたで、きつと、猿は来て火を焚いてあたるに違いない。それでみんな手分けをして、仇討ちの手分けをして。カニと蜂と臼と牛の糞。牛の糞というのは、やわこくて、猿が乗ってもだれが乗っても滑って、ちゃんと転ぶようになるで、みんな分けて。蜂とカニは水がめへ、猿が来るのを待ってる。それから栗は、囲炉裏いろりへ隠れて、猿が寒いって来て火にあたるそんなとき、飛んで猿に火傷やけどさせる。そういうことにして、役割り決めたら、

「ああ寒い寒い」

って言うって、あわてて猿が来て、火を焚いて、かますへあたってたら、カーンと栗が出て、その勢いで、猿の腹の毛の抜けてる腹へ飛びついて、それで火傷させた。

「こりゃあいけねえ。よし、早く水がめのところへ行って水つけよう」

と思つて行つたら、蜂にチクンと刺されたり、カニにかじられたり。痛えところまた、

「こりゃあ早く出て、向かいの山へも逃げよう」

つて。それで外へ出て行つたら、牛の糞を門の入り口にあげといて、臼は上へ上がとく。それであわてて飛んででてつて、猿が飛んで出てつて、下にいた牛の糞でもつて転んで、ベタンで転んで。

「<sup>(15)</sup>こんときだ」

つて言つて臼が、上に待つてたから、ドシンと落ちて猿をつぶしちまつた。それで、みんなで寄つて仇をとつた。

#### 六地藏の由来

(池田町・荻)

(・・・聴き取れず・・・)間の所に、今でも立つてるだいに、あれはね、その、あみの部落の衆が、あつちでもこつちでも子供が亡くなつたなんでもんだね、子供が弱いつてもんで、あれは六地藏様をたてて信心すりや子供が無事に育つというんで、それで、ああいうものをたてた。

六地藏つて、ひとつの石のこう、物語つて、それで六人地藏様が、六人きり、切り込んであるだ。それで六地藏と言つたんだね。

そうやって、あの、信心したら、あの村の部落で、信心をしたもんだ。

狐に化かされた話③

(池田町・萩)

それで、どうしても使いでもって松本へこれから行ってこなきやならない。それでひとりでもって、みんなでもって、やえがまをやった。うすひきをやったの。やえがまをやっていた衆に、まあ今倒れてここへ来て、やえがまを、今始めたところが、お前、今帰ったら、それでうすひいてたけど。ひとりでもってご飯盛って、ご飯じゃないや、煮込みを盛って食べたって。そして松本までこれから行ってこなきやならないんでって。

狐に化かされたってことは、その、覚えもあるで、出かけに鉈なた、鉈を腰にひっかけて、そして出て行ったって言った。それで帰ってけえってこないって。どこ行ったか。

「えーっ。帰ってこなかったんですかあ」

それでまたみんなが呼びに出て。そしたら清兵衛  
って人で、

「清兵衛や、清兵衛や」

って呼ばっしやったら、最初は返事がなかったって。それで後になって、遅くなって、

「そんな馬鹿なことはない。きっといるんだ。どこかにいるんだ」

と呼ばって、下って、下に行つて、こう向こうの、この山の向こうの水。沢が、ひの沢のもとだわね、その沢のもとのところへ、上に行つたら、

「おいおい」

って小さい音がして。聞けたって。

そしたら、この下にいたわって。清兵衛がいたわ。狐に化かされたんだって言って。みんなで見つけて助けたんだ。

こうやってみると、やっぱり狐に化かされて、かこいのそうまさ木を削ってそれで積んであった。

杵組みしてあつた木に腰を掛けて、そして、

「俺は今、かず屋の旦那様に頼まれて松本へ仕入れに行ってくるだ。それで今、茶屋にかかっているところだ」

って言うって。

「なんだこの馬鹿。目の前に並べてあるのは何だと思うだ、馬鹿」

そう言うって、えらい騒いでいって。並べてある焚き木の上に並べてあるの、何だと思えや。そこに置いて、馬糞を拾ってきた。それから、石ころ拾ったり、角木の上に並べておいて、そして、

「俺は今、茶屋へかかっているところだ」

と言うだ。この馬鹿。狐に化かされてるんだわ。それで、鉄砲打ちにしろ、空鉄砲からでもって、耳根っこに打って、鉄砲打って、それで狐が離れて、裏に連れて来たって。それが池田から来る、上へ上ってきた話だね。

先は、池田から来るに、やっぱりそういう、うす暗い頃になってくによ、油を買って提げて来るとかね、そういうものを提げて、みんな町行った衆がやって来るだ。そうすると、先にこちらの衆、村の衆は行って、大勢でもって、今度一緒に町から上ってきた。そしたら先人がいると言う。ガヤガヤガヤガヤと話し声がするだ。だから後から、

「清兵衛やい、清兵衛やい」

って、おらたちも来たで、

「待ってくれや。おう」

俺、あの、池田からちよつと寄つたところに、水の出るところがある。そこで、喉が渴いたんで、こちらの衆はみんな、水飲んじゃ上ってきたでや。そのことは、水汲み場って言った、水汲み場まで待つてるでな。かけ茶屋の峰で待つてるから、もとかけて茶屋の見えていた、大峰の峰っぱりまで上って行って、こっち見てる。そこまで上って行って待つてる

で、早く来いやつて。

そして、先がガヤガヤ話をする。それで清兵衛つて人も、一所懸命に急いで来たらしいが、狐に化かされてやつてるもんだで、先行くんだつて。本物の人間じゃねえだ。清兵衛なら、狐が離れて城に帰つて、そういう話を清兵衛つて人がやったつていう。

それで向こうへいつくら行つても追いつかねつて。

つい<sup>つが</sup>尾<sup>のお</sup>まで連れてかれて、追いつかずに来て。

後で話して、そんな馬鹿えれえ目にあつた。塞<sup>さい</sup>の神つていううちがあつてね。尾の尾の村のはじめにそこに寄つて、

「俺は今夜、魂(たま)が抜けて、狐に化かされて、村の衆が大勢でもつて俺を待つてて、一所懸命待つてろつて言うけれど、どこで待つてるのか、そこで待つてるつて言つて。それで後から行けば、またここに上つて行つてしまつて待つていない。それで狐に化かされた」

つてそう言つて来たつて。それでうちに来て、

「それはまた大変だ。まあ夕飯でも食べて早くうち行つて夕飯でも食べて寝ろ」

つて。そして行つた、そこを出てうちに行つて夕飯食べて。

「今度俺は、どうしても、かず屋の旦那様に頼まれて、松本へ話に行つてこなきやいけん」

つて。そして、すぐ飛び出して行つたつて話。

それがそうじゃなくて、かず屋の旦那様に頼まれて松本へ行かなきゃ、松本へは下、行くだつて、行かなくて、沢へ下つてつちまつて。それで、狐に化かされたつて。さんざんそうやつて狐が離れたら、うちに連れてきてね。それがもつて、じき死んじやつたつて。

秋葉神社の話

(池田町・荻)

秋葉様にはそればかりでなくて、今は年寄り衆が昔から秋葉様に願ひ事して、それはまあ確かに不思議なことだわね。迷信っていうものの、こういうことは(・・・聴き取れず・・・)

手の甲が、いっばい指の方まで両方にイボができてる人があって、それでこのイボに弱っちまった。いっばいイボでこすり取るわけにいかね。それを秋葉様に頼んでイボ落としを頼んで。

秋葉様に何歳になる男だか女だか、それがイボができて困るから、このイボ落とししてくれと。落としにくれりや芋の子(むかご)、芋の子知らねえか。芋の子ってのは長芋、長芋のつるに丸いイボみたいな芋の子があるで、玉みたいな、豆の木のような玉が。その玉をあげる。玉を、それを閏年のときには十三、普通の

年には月の数、一年の月の数あげるで、芋の子あげるで、是非落とししてくれ、イボを落とししてくれって頼んで。

まず、おそらくこれじゃ願掛けって。こういうのは願掛けっていうだが、願掛けしてやったらこの人は治って。この村の、おのおおばあさんっていうかな、その人が教えてくれたぞ。

そして、そのおばあさん、ここから梅の尾、中央の学校のある、ね。あの部落の人が、足でも手でも、イボができたなら、ずっと、どうか秋葉様願掛けしてもらいたいんですが、って頼まれて願掛けしてやったことがあるだ。そして願掛けしてやったら、きれいに治ったって。治ったって分かったら、

「秋葉様に願掛けしてもらったおかげで、きれいにイボが治っちゃったで、どうすればいいだ」

「それじゃあ、芋の子持って心ばかりの気持ち、燈明錢でもつけてあげとけばいいわ」

って教えてやったら、喜んであげてきた。

### 餓鬼岳がきだけの金貨

(池田町・六地藏ろくじぞう)

荒々しい感じの山ね。わりあい近いところに見える山で、そこには埋蔵金の話ありますけど。池田史話にもそこにでていますけどね。なんか、私もすっかりしたことは分からないけれども、誰かが何年か前に、その、一緒について来いって言われて、行って。そして、どこか山へ、餓鬼岳のところだね、泊まったときにその(・・・聴き取れず・・・)越後の方からどっか持つてく。その、あの、お金を、あそこで遭難して、埋蔵したのか何だか知らないけど、その埋蔵金なんて話は昔からあるけれども。

ある人が連れて行かれて、そして夜、自分が寝ている間にちよつとその人が外へ出たもんだから、そつとついていたらそしたら、こう岩の穴みたいなのこからちよつと石かなんか持ち上げて覗いてみて、伏せて戻ってきたもんだから、そこへ行つて、覗いてみたら金貨があつて、それでそのまんま、あとすぐ合わしてきて。トイレに起きたふりしてきて寝て。

それで次の日には戻つてったけど、上った道とは違う道から降りてったもんだから、あれがどの辺かなあつて思つて一生懸命見て降りてったけどね。それから十年くらい経つてからその、隠したつたって人が何か亡くなったとかだもんだから、自分がそのもとの道を頼つてそこ行つてみたけど、どうしても金貨のあり場所がわからなかつたつて。

それを探している人は今でもいるようです。軍資金を。

四人峠<sup>しびと</sup>

(池田町・六地藏)

四人峠っていつてますけれども、私たちは、しびと沢とか、しびと峠とかあってね。それでこの私は、それは死のつく、その死人沢とか、死人峠とか、そこで昔何かがあったのかなあと思っていましたら、そうではなくて、しびとつてのは四人の字を書くんですってね。だから、なんか昔あの、四人の侍が通ったとかどうとか、そういうあの、何というのかな、あんまりあの、深い意味ではないみたいです。あの私が、死人沢、死人峠って、あそこをいつてましたからね。だから、昔そこであの、何か死刑執行だったとか、ね、何かそういうようなところだと思つてたんです。死人が、死人の関係だと思つたらね、あんな山の中ですしね。もしたら、それがそうではないと聞きま

したから。そんなことばかり思つてましたから、その辺のところは。

六地藏

(池田町・六地藏)

六地藏っていうのはね、ここにあるんですけどね、今たっているこの六地藏のお地藏様は、あの、向こうの方の掘割りの上にね、昔ね、何ていったかなあ、尼寺があつたんですって。それでどの尼寺に、あの、あつた、よくお寺の門前には六地藏様つてありますよ、それを持ってきて、たてて持ってきたって人もありますけどね。

その人の話には、これと同じものが(広津<sup>ひろつ</sup>の)北足沼にあるんですよ。そうしたら北足沼の人がね、

あの、そこから持ってきてね、その門前にね、あの両側にあったものを持ってきて、ひとつはここへ置いて、ひとつは向こうへ持ってつたて。重いから置いたってそこに。

藤尾の観音様って行って、あそこの本尊様があつて、なんていったかねえ。何か国宝だか国の重要文化財だかよく分かりませんがね、何かあるんですよ。その、この真正面の藤尾ってところに観音像ってあつてね。そこに何か、いい仏像があるらしいんですよ。それで、その真正面で、こう、昔はあの使ったもの馬ですからね、あの、往來に、広津から池田行くのに荷物を運ぶのにも人を乗せるのにもね。馬で通って、ここを乗ったまま通ると、その、うんと気の荒い観音様で、あの、どうした、落ちたとか、馬から落ちた。そんな話も聞いていますけれどもね。

こたつ

(池田町・六地藏)

南の国の人々が北に来たとき、中入ったら、ご主人が、真ん中に、四角いものが置いてあつて、どうぞお入りくださいってつから、じゃあ入ろうって、裸になつて入つたつて(笑)

継子落とし

(池田町・六地藏)

継子落としってのはね、昔、あの、何というか、見た目には、こう、きれいなんだけど、ちよつと怖いような崖がありましたね、そこから、昔、継母が、子供を突き落としたつてとかね。

登波離橋とはり

(池田町・六地藏)

登波離橋ってのは、昔、あそこに、何てお城だったかな、お城があつてね。それで、たまたま、あれかねー、殿様の、何というか、愛妾あいしやうというか、お妾めかけさんという、ね、そういうんだと思うんですけどもね。

あの、そこは、すごく怖いところなんですよね、あの、谷でね、突き落として、あのー、そこへ、突き落とそうと誘ったらそれを、あの、何だ、感じとつてね。その人が、それで、あの自分の着物の裾と、奥方の着物の裾と、あの、十針とはり縫って、縫い合わせておいたら、そのお妾さんも死んじゃったけど、奥方も、ひっぱり落とされて、死んじゃったっていうような、そんな、あれで、十針(とはり)、十針(とわり)、十針(とわり)の、登波離橋(とはりばし)。

箸塚伝説はしづか

(池田町・六地藏)

あのー、たぶん、中沢さんとこ行って、お聞きしたと思うんですけどね。箸塚を私たちは、昔から、武田信玄がこの辺でもって、あの上杉謙信と武田信玄の戦争があつたらしいんですよ。それで、そのときにね、武田信玄の子供か何かが、ここで亡くなつて、たぶん、それでも遺体は、向こうへ持って行つたと思うけれど、亡くなったときか何か知らないけども、そこへ、あの、何か、銀の箸が埋めてあるって話、でね。それで昔、それはあのー、この前見に行つて分かったか、分からなかったか、見に行くつて、おっしゃったこの前いらした人が、それでね、よく分かったかな、どうしたかと思つてただけど。

松の木、ころんっじやっているもんでね。それでも、多少その下に塚らしいものはあると思うんです

けど、分かったって言うてましたか・・・そうですね、だいたいね。前は、松の木ですぐ分かったんだけども、こう、かしいでて、ころんじやったみたいだから、分かるかしら、どうしたかしらと思つてたんですけど、いっぺんいらして、分かったかどうかってことお聞きしなかつたんで、分かったかなあと思つたけど・・・

銀の箸が埋めてあるってことでね、その銀の箸を取り出そうとして、昔から掘った人、掘ろうとした人が何人かいるんですつて。だけれども、そのー、掘ろうとすると怪我をしたり病気になつてきたりしてね。あのー、それで、ほれ、そのまま掘つて、銀の箸を掘り出したって人は、あのー、なかつたっていうのは、私が昔から聞いてた話でね。大部分の人が、そういうふうに言つたんですけれども、あのー、中沢さんがね、あのー、ここの広津の史跡を調べてましてね。その人が言うには、あのー、んーとね、向こ

うから来ると、けず・・・岩をこうなつてたらしいところを、こう、掘り割つて、道を作つてあるけど、こちの道を広げるために岩を崩しているところありましたでしょう、ねえ、坂ずーっと上つてきたあそこが、掘割りつていつてますけれどね。あの、ちよつと向こうの上あたりにね、一里塚があるんですつて。

池田から来た、あのー、それでね、そこから数えてみて、そのー、一里塚じゃないかって言つて、一里塚つていうと、道の両側に塚をおいて、それで、あるけれども、片っ方しかない、一つしかないけれどもね。それは、道の変化かなんかの関係でなくなつた。そのー、その一里塚というものがね。何と、中沢さんの言うには、んー（・・・聴き取れず・・・）ここから東とか、西とかつて、そういう、あのー目標になるものが、近くでなくてね、ちよつと遠くでもつて、そのー、やつてあつて、あの辺に一里塚が、どうしてもあるはずだと。それだもんだからね。そのー

何というか、武田信玄の銀の箸ってのは、まあ、伝説みたいなそんな感じで、一里塚が本当じゃないかって話は聞いてるんじゃないかと思うって。そんなそれも、はっきりしたことは、その一里塚ってものが他にないから、どうやって調べてもね、ないし、昔のあの道のところだから、一里塚じゃないかと思うって。

それは、私も、好きなもんだからね、話を。そうしたら、中沢さんは、私にいつやら・・・主人と仲良く、友だちで、しょっちゅう来てたもんですからね、今でも出てけば寄ってお茶を飲んでくって、あれなもんです。ですから来れば、あれって、話を好きで。そのときにね、何か話のついでに、あのー、そうじゃないかと思うって、中沢さんはそう言ったから、それが一番本当の話じゃないかって思ったらね、そうしたら、その、中沢さんに聞いた。

これは、ちよつと前かなあ。あれは、昔、ここで、

疫病がはやったときにね、そのー、疫病でもって亡くなつた人のお箸を、みんな集めてね、そしてあの、あそこへ封じ込めたっていうか、押んでもらってね、それで、あのー、埋めたんだ。それで、箸塚っていうんだって話を聞いて、たぶん、その話を聞いたもんで、中沢さんに、私が、あの箸塚ってのは、私は銀の箸がいけてあるって話を聞いてたけれど、こないだちよつと話聞いたら、そういう疫病の人の亡くなつた人の箸を封じ込めてあるって。

そのー、何か、しまるとね、あのー、何か、病気になるったり、怪我をしたり、ということがあつてね。それで、あれだっていう、そういう説もあるけど、まあ、そっちの方が本当くさいかねって言ったら、俺は一里塚じゃないかと思う、そうやって言い出した。どうしても、そこは、あの、掘割りの上の辺りに一里塚、それは確かに一里塚があるんですって。

それで、そこから数えると、どうしてもあの辺り

にあるはずだけど、他に一里塚らしいものがないから、一里塚じゃないかって。だから、まあ、その一里塚のところへお箸を封じ込めて、それで、その、箸塚といったのかもしれないし、あのー、どっちにしても、塚があることだから、ただのあれじゃなくて、そういうことかもしれないなあって。

ただ、それは、私たちだけの考えで、はっきりしたことは分からない。ただ、伝説的な話だけで、ただ、一里塚でもあり、箸塚でもあるのかもしれないわね、いうだけの話なんです。で、この話を、こういうはっきりした話でもって（・・・聴き取れず・・・）その話を聞いてるってだけで、はっきりしたことは誰も分からないで、箸塚は、そのくらいのところなんですけれどもね。

中ノ貝（池田町広津中ノ貝）にも、私、あのー、親戚のおじいさんからね、聞い（・・・聴き取れず・・・）六十いくつで、何年か前に亡くなったおじいさんが

ね、その、中ノ貝の下に石碑があって、そこに、その武田信玄の息子が一人亡くなっているという、あの、言い伝えね。そこに、何か石碑らしいものはあるって言って、私も行ってみたいなと思ったけど、行ってみたことはないんですけどね。そういう話は聞いたことがあるもので、何かそれ、その、あれと、この箸塚の銀の箸ってのは、何か一緒・・・箸が埋まってるっていうから一緒になっちゃったのかなあ。

じゃあやっぱり、向こうが本当なのかどうかは知らないけど、何か、石碑らしいものはあるって。私の聞いたところではね、昔あるって言ってましたけどね。だから、それにひっかかって、それが銀の箸になっちゃったって言って。何か、昔のことだから、疫病で死んだ人のお箸を埋めて、もうこれ以上、疫病がはやらないようにって押んで、封じ込めたって話は、何か本当っぽいような感じがするしね。それを一里塚へ埋めたのかもしれないって、あの、ただ、その繫

がりを考えるとね、はっきりしたことは分からない。言い伝えなもんですからね、分からないんですよね。

## 落人伝説

(池田町・六地藏)

中ノ貝つてところにはね、あのー全部北条なんですよね。今、きたじょううって読まれてますけどね。全部北条でそれでお寺がねえ、あの、あそこ行つてみると分かりますけどね。

お墓の石塔にはねえー平の何とかって書いてあつて、きたじょう・・・ほうじょう何とかつていう・・・書いて、どっちが上なんだか下なんだか知らないけど、そのー書いてあつてね、だからそういう風に落人だとかね、それからそうするとね、隣の日野の部

落つてのは原の名字で、原は藤原とか、そういうことに繋がって藤原っていうと藤原・・・どっちになるんでしょう。あれは・・・源氏ですか、藤原は・・・そうするとね、年代が違うのか何かそれは分からないけれどもね。どっちがどうするか、原という。それだから、北条と原というものは繋がりはないようですけれどもね。

そんな、あのー昔の(・・・聴き取れず・・・)けれども、それも中沢さんが言うには、原というのはよくここらに、仁科にしな何とかの守とかつていって、ここらを昔治めた人の家来だつて言うんですよね。だからね、その伝説なんてものも、何か作りっぽいような気もしてね、それでだから、どっちが本当なのか、ね、で、だいたいが平家がこんな所まで落ちて来たつて、落ちて来たのか、それとも昔、そのー何でしょう(・・・聴き取れず・・・)治めた人の関係で来たその一族が、こう、残ったのかもしれない。何がどう

なったか、知りませんが、その北条というものは、平家であるとかないとかいろいろとね。まあそんなにいったらといって、いうわけじゃない。お墓が古いことは事実のようですね。

本当の、あれは、分かりませんが、ただ私が見るのにね、私は、もうこの生まれじゃない、生坂いくさかの方から来たんですけれども、ここで生まれたって人って器量がいいんですよ。

私が感心するのはね、あの、まあ美人が多いですねえ、だからね、それなりに曰いわくがあるのかなあとも思えば思いますね。やっぱり昔ね、都落ちして来た人の子孫だと思わせるには、一番それが本当っぽいかなあって。ただ誰もそうは言いませんけど、私を見る目にね（・・・聴き取れず・・・）とかね、平出ひらいでとかね、器量のいい人が多いんですね。

ただ、こんな山の中だと思うせるには、なんかその昔のその、仙人が住んでたつてのは、あの、あまり

ちよつと不思議かなあと思うんですよ。で、こんな山の中だから、あの、武骨な人が多くてあたり前だと思ふんですけれどね。

ここに住んでる人はそれ感じないかもしれないけども、あの、もう私らみたいなの、まあ、不ふが付く方の美人がね、来て言うには、やっぱり何かね、ここで生まれた人には何となしに（・・・聴き取れず・・・）知れないけれど人間性は大らかですしねえ、本当に何というか、お人好しの人が多いし。

狐

（池田町・六地藏）

そののねー、あのー、今ね、ポンプ小屋と研修センターがありますでしょ、あの上に昔は分教場があ

って北山学校っていったんですけれども、昔はあそこに建物があったのはその北山、北山学校ってって小学校の三年か四年くらいまでの分教場で、先生がたぶんひとりくらいおいででね。そしてあのやうな分教場があつてね。

そこに出る狐は、みごをたてたつていつて。みごつていうとね昔、ほら、稲をだんだんこう、重ねてつたから、この辺は稲がないから草を、茅かやみたいなものを刈つて、屋根を葺ふくときに、えー麦っからだけよりは、茅を混ぜると丈夫だつてことで茅を刈つてみごつていうと、こう、重ねてね、積み上げておくんだけどね、そういうものを、あの、たてたつて、それがそこに見えるとそこ通つた人が狐に化かされたつて。

狐、化かすときには、みごがたつたつてことをいうんですけれどもね、それであのー、人が（．．．聴き取れず．．．）化かされたつてのはないけれども

よく、あの、狐に化かされたつて言いましたね。

そこるところに、七窪つていいましてね、その上に田んぼがあつたんですけどね。なんか昔、どつかそこらでもつて誰か、そーこう、昔は着物で、尻をからげて、すたこらすたこらつてとんで歩いててね。そしてあの、行つた人がみたらこころ辺をとんで歩いてる人がいたもんで、どうしたつて声かけたら、今、いそ、東京へ行くところで忙しいとか言つて、何かそうすると、小豆あずき洗い、といつてね、狐がしつぽで水をぱたぱた叩くとね、しゃっしゃっしゃっしゃっしゃつと、お米を研ぐつていうか、小豆を洗うよやうな音がするんですつて。それでその、小豆洗いつていうさうですけれどもね、何か馬鹿らしいよやうな話なんですけれどもね。そんな風にして化かされたとかね。狐に化かされたつて話はいっぱいある。

油揚げや何か、お葬式の帰りにね、お葬式の帰りだと、油揚げを持つてるとよく、狐に化かされたと

かね。化かされたっていう話は、本当にまことしやかに、確かに見たとかね、そうとかって言うからだけど不思議ですね、本当に、本当かしらなんつて。

でも夜ね、私がおこへ、ここへ来てもう四十年にもなりますけどね、昔はよく、（・・・聴き取れず・・・）言ってるよと見て、どうしたって言ったら、その前にしゃっしやっしやっしやっしてあ、小豆洗いの音がしたからね、これは狐がいるなって思って来たたら、そしたらその誰かがその一生懸命、尻からげて、どうしたって言ったら、（・・・聴き取れず・・・）で忙しいとか言って（・・・聴き取れず・・・）自分が（・・・聴き取れず・・・）してたとかね。化かされるのは夜、たいがい夜だったそうですけどね。

それからあのー、昔はそのー、んーと何ていうんでしよう、よく、陽が当たって雨降ると、狐の嫁入りだとか、いいますけどもね、昔そのー、遠くの方に火がね、あのー、いっぱいに見えてね、そしてあの、

それが狐の嫁入りだとか何とかいつてる話があったけれどね。

何かね、この頃聞いたらね、そうしたらそれはあの、蜃気楼だつていうお話聞いたんです。それでその後、狐の嫁入りの火が見えるのは、私も見たことあるんですよ、えー、この火が見えるのは、山と水がなければ確かに見えないつていうんです。

私が見たのは、あのー私、生坂いくさかのところですね、暗くなる頃に犀川さいがわの・・・こつち側に向こう側と道があつて、こつち側見たら、向こう側の山のところには火が、鬼火だとか狐火だとかつて昔ね、よく言つたけど、狐の嫁入りだとか言つたけど・・・

そのー、狐が提灯つけて火をね、あれしたつて言つたら、それは骨をくわえてね、狐がとんで歩くんだとか、そうすると、燐りんが光つてね、それで見えるとかね、そういうふうに言われて、それが、本当かなつて思つてたら、この間ね、あれはね、あの、蜃気楼だ

って、まだだから夕方とかね、暗くなったらばかりの頃に見えるけれども、その山に陽が反射して見える、蜃気楼だって言った人があるから、それでもね、それが本当なのかね、こう、狐が骨をくわえてとんで歩いてるのが本当なのかね、それは、あの一、何なのか、火がこう、ぱっと明かりがね、火が、たくさん見えるのは事実なんです、見えたのは。たっくさん見えるんですよ。

でもそういえば不思議なことに、この頃は見えませんね、世の中が明るくなったせいかね。夜空が真っ暗だなんてことありませんからね、そういう、今見えないというのはね、時代が進んで狐も人を化かさなくなったのかね、どうなのかなあ。知りませんけどね。

#### 小太郎伝説

(池田町・日影)  
ひかげ

・・・この犀川さいがわの近辺には伝わってるんだよ。泉小太郎っていうね、あの一、犀にのって渡ったっていう、昔は全部ここらは湖でね、それで、泉小太郎ってのが、犀に乗って渡ってね、それでその水が引いたってことかい、引いて、安曇平あづみだいらができたって、昔の伝説のこと、だけはある。【犀動物のサイのこと】

#### 狐火

(池田町・日影)

・・・二つか三つにはあーっと分かれてね、あれは狐火だなんて言ってるね、そういうことちよいちよい

聞いたことあるよ。そういうことみたことあるだ、  
私は。うん、あれは狐火だわってねえ。それこそあんな、見たことあるねえ。あれはどういう現象で起きるんだろうねえ。ああいうのはちよつと解らないねえ。火はねえ。一つの火がぱーつと燃えて、夜だよ、辺りが暗くなってね、その火が一つ燃えたと思えばね、三つくらいに広がる、飛べるんだ、ここに火が燃えたとする、こつちも、またここらも、ここらも、火が見えて、そういうことはね、本当に見たことあるよ。あれは狐火つてもんだわ、つて。

【採話者からの質問】

狐に化かされたとき、お酒に酔ってるってことは？

【話者の回答】

んー、ぜーんぜん。疲れているとか、眠いとか、歩  
きながら何か考えていたときなんか、なるな。

ふくろう・家の主<sup>ぬし</sup>

(池田町・日影)

ほーほーほーほーって鳴くでや。その、何か、人を呼ぶような鳴き方してるでや。要するに、あの、発情の時期で、それが鳴くと人が死ぬとか何かいうんだけど、今はあんまりねいが、くる、くる、つて・・・要するに、季節の変わり目で、人間の方も調子が悪くなってくる頃じゃない。

うちに鼠<sup>ねずみ</sup>がいるんだ。鼠を餌に蛇がいつくんで、我がとこにだって蛇はいるよ。今の主だって大事にしてる。鼠を獲ってくれるから。

佐々小判

(池田町・日影)

ハイノキ岳を越え来たわけだけど、そのとき、雪でもって、それが池田の衆が入ったってでや。浅川って人は、それを、そのね、目あてで掘って、身上しんしょう潰つぶしちゃたっていう伝説がある。伝説をほんまに信じちゃったんだね。そういうことは聞いたけど。

狐

(池田町・平出ひらいで)

・・・あのー、昔この辺は、大きい樹が茂っていたところだもんでね。乗り物だっけなかつたもんでね。池田の町へ行って買い物してくりやあ、途中で化か

されて買い物盗られちゃったとかってねえ。そんなような話をよく聞くねえ。

家行って開けてみたら馬の糞が入ってたとか、おそうめん盗られてミミズが入ってたとか、そんなよ  
うな、話には聞いたがねえ。

それほんずらか、狐がよく昔、自分の目の前からずーっと向こうの山の峰へ、提灯をつけてねえ、見したりしたってことは本当らしいね。何かね、最初は大きくて順に遠くの峰までずーつとはって見してね。そいで、そばは大きくて順々に遠くには小さくしてね。本当に、お前は上手にしてやってるなって、父さんが見たって。

父さんは亡くなったらが、父さんが今生きてれば・・・それは狐の仕業だっけ思っただけねえ、腰をすえてお前は、まあ上手なもんだなって言ったら、こーんこーんと言っただけで逃げたって。

## 大池の話

(池田町・会染法道)  
あいそめほうどう

(・・・大池は)周囲三メートルくらいな池なんだけど、その池は、下の深さつてのは何メートルかな、長い棹が、こうやって、埋もれるような感じで、そういう池で、その池には昔は、大蛇・・・こういう蛇が棲んでいた。大蛇が棲んでて、信仰してやると、今日は、婚礼がでたで、祝言ごとやるで、お膳とお椀を貸してくださいと言え、その日にちゃんと、自然とお椀が揃っておったつてことを昔は言っていたが・・・

## 登波離橋

(池田町・会染法道)

登波離橋の名前がついた由来つてものはある。登波離橋つてのは、絶壁のところこういう橋をたててあつた。そこへ、昔はこういう橋があつたんだ。

ある、池田町の下しもに本妻と妾めかけがあつて、そして、まあ、妾を、どうか殺してやりたいと、それでね、本妻と妾と男と三人で登波離橋へ行つて、絶壁の橋の上から突き落としたつて。そして、本妻が妾の裾と、亭主の裾と針で十針縫いやつた。まず突き落としたら一緒にその妾も、亭主と一緒に絶壁から落ちて死んで、それから十針橋とはりで、そこで死んで、それから沢の方には、頭が二つある蛇になつて、そこに棲んでるんだ、ということ、十針橋に、針を十針縫つとくから、十針つて、そういう名前になつたんだつて、昔からいつてるで、今何てこう、池田町の名所になつ

ていて・・・

泉小太郎

(池田町・会染法道)

泉小太郎って人はねえ、池田町からずーっと日本アルプスとこの東山までの間、これは昔は海だった、西の山とこつちの山の間、今の安曇平って行ってね、大町、大町って知ってるでしょう、大町ってのが、盆地だけど、白馬、しろうま岳ね、あすこの間をずーっと、南は明科町あかしなのときまで昔は犀川さいってのが流れててそこにその川が流れててその川の両側がずつとどのくらいだったか、ものすごい広いわけで、それを昔はそういうの犀川の手前までいって山になつてて、それがみんな湖(うみ)だった。

そのもともと湖になつてる山を切り拓いてその水を流して犀川ってところにだな、流した人が泉小太郎だな。それが山を・・・今みたいにブルドーザーもないだが、手でやったのかな。切り拓いて水を犀川に流してやって、そしてこの安曇平ってもんを作ったんだ。それが泉小太郎という。

化かされた話

(池田町・会染法道)

自分が、要するに迷ったりして、それで、方角も何も分からなくなっちゃうんだな、あんなものは化かしちゃしねえと思うんだ。

ただ二十歳時分に、山に行つてそしてその畑に行つて、ざいこざいこつて、昔の、木こりのやる鋸の音

が、ざいこざいこがさーんって音がする。がさーんって木の音がして誰が切ってるのか木がここにないだな。おかしいなー、あまりおかしいなことで自分で音するところへ行ってみると、切ってはなし、そういうのは実際問題として、まあ化かされたんだな、自分は化かされたと思わない。

仕事していて木の音がざいざいざいざいって、どうしてあんな音が出るのか、ざいざいざいざいって音が、ばさーんって、これが化かされたのかな。これはまあ、山が夜暗くなってきたとき、帰ってきて、この道を越えてきて、道がなくなっちゃう。いや、おかしいなあと帰ってきて、この道を越えてきて、道がなくなっちゃう。いや、おかしいなあと帰ってきて、何度でもそうやってきて、そういうのを化かされたと・・・そのうちに、こっち行ってみようって違う道に入る。それが化かされるとよく言った。

ちよっとおかしいなと思ったら、煙草吸う人は、

昔は煙草吸って、おかしいなと思ったら一服吸って、狐が化かしたと。そうじゃなくって、結局、自分が冷静になって考えてみりゃ、初めて分かるということがある。

不思議なことに、木の音はどうしてああいうのがでるのか知らんな。あれは、狐がやったっていうよりムジナで、狸で、若い衆に言わせたなら狸というよりムジナで、この辺も狸がいて・・・

じゃーっと提灯をつけて人が歩いてくる。昔は婚礼ってふうのは、どうしようもねえ、何にもねえから、じゃーっとみんな列を作ってみんな提灯を一個ずつ持って歩いて嫁入りして、それはもう嫁入りは提灯を持って十人なら十人、十五人なら十五人並んで歩いて、峠の中に消えてったのを、狐の提灯出たなあって見たことがある。

ほんと提灯のように見えるでなあ。道をずーっと歩く人、これなら見たことがある。

爺ヶ岳じいがたけの雪形

(池田町・会染法道)

爺ヶ岳、これは白馬山の手前。爺ヶ岳には、こつちからはずーつと南の方で、南の方に、じっ様が種をまいている風な具合に消えてくんで、それで、昔の百姓は、爺ヶ岳の格好ができてくると種まきを始める、ちょうど、おじいちゃんが種をまいてる格好に見えるんで、それで始めて爺ヶ岳の種まきが見えるんで、種をまかなきゃあいけねえわ・・・山には、自然に、春、夏じゃないな、四月中頃までに、見えるようになっってくる。

桃太郎

(池田町・会染法道)

(・・・聴き取れず・・・)それが、大きくなると、桃から生まれた桃太郎、鬼征伐に、猿と雉と何か連れて、桃太郎きび団子をおじいさんとおばあさんからもらって腰つけて行った。

「桃太郎さんどこへ行く」

「これから鬼退治に」

「俺も一緒にお供さしてくれ」

「それじゃあ一つきび団子をやるわ、それじゃお前も一緒について来い」

って、猿も雉も連れて、一緒に鬼ヶ島へ行って、鬼を征伐して宝物をみんな持って帰ってきたというのが、昔の桃太郎のあらすじだな。

## 家の宝

(池田町・会染法道)

(・・・聴き取れず・・・)年数をくつてりや主ぬしになつた、大きくなつてたら。それは、普通はあの一、普通の土蔵とかに、そういうところにみんな、穀物を入れる蔵にな、いつの間にか蛇が入つちやつて、梁はりつて一番上、屋根の上にかういう、大きな木があるわけ。

そこへ蛇が、大きい、こんなに長くなって、いるわけだなあ。そうすると蔵の中には、鼠ねずみがいっぱい増えるわけ。その鼠を、食つて蛇は生きてる。

それでそれが主になつてそれで鼠をよく、猫の代わりに鼠をよく獲つてくれるんで、主だつて、そうするとそれで大事にして、見かけても殺さねで、そのままにしとくだ。

それがだんだん年数が経つんで、大きくなつちやう、普通だつたらだいたい、こちら辺の山にいるのは、その倍くらいだけど、大きなのになると、ビール瓶くらいの太さになる。それくらいになると昔の人は、大きい、あれは主だよつて、そう言った。

足跡あしあと

(池田町・会染法道)

足跡が、八坂やさかの、その向ここのその山を越して向ここの山になるが、八坂村つてとこ、八坂村からね、跳んで、そして、跳んで足を踏んだのが、あー、日野、日野つてところで、日野の上の一つ大きな池がある。

それからまたばつと跳んだのが、今、さつき言った大峰って、そこに足跡が跳んで、それも池になっている。

そこから跳んでこの山の一番頂上に池があつて、その足跡があつて、そして今度は松川村に跳んじやつた。そういうことを昔聞いたがね。

### 埋蔵金

(池田町・会染法道)

白馬平の、その峰にあるっていうんだけど、池田町の中山っていう人が、中山さんは明治時代の中山さんが、その人が、自分の身代をかけてそうして探したが、遂に見つからなんだ。

埋けてあることは事実だっていう、今や、今までやったのかは伝説みたいなもので、どこの松の木に歩いて、それからどっち行ったとか、そこ行つてどうする・・・ものすごく掘つて、それで身代潰すのが、ある。

### 林中久兵衛さんの話

(池田町・林中<sup>はやしなか</sup>)

大岩つてところから来たらしいんですけどね。そこはそれほど、その、ここから上は幾らかその、家があったけれど、これから下の方には家がなくてね。そこに、まあ、大岩つてところから来て、そして開墾したらしいんだね。開拓して、そして、まあそのとき三

人で来たらしいんだけどね、久兵衛って人と、弟の、作左衛門って人と。

で、あの、隣、ってことでしょうけど、その人は兄弟でなくて久左衛門って人と三人で来たらしいんだね。そしてまあそこ、これから下を開墾して、すごく働き者で、開墾したらしいんだけどね。昔はあの、殿様があの検見<sup>けんみ</sup>ってことをして、そして年貢を取り立てたらしいんだね。

そしてそのときに、この辺はもう、そんな開墾したばっかで、昔のように堆肥もないだしね、開墾したばっかなら、何にもないし山行って刈敷でもとって、刈敷って、分かります？

刈敷ってあの、木の枝や何かをとってきてね、そしてそれを堆肥に入れるか、そうですね、そんなことぐらいで何も、肥料のないようなところでね、河原みたいなところを開墾、砂地みたいな所を開墾してやって、米のとれない、年貢が高すぎたんだね。

それで久兵衛が、

「そんな取り立てられたんじゃ、ここの者は食っていけないで、もつとまけて欲しい」

って言う。そんでも、

「まけられない」

って言う。それで口論になって、まあ、昔はそういう殿様なんかそういう人にたてつくっていうかね、すると、もうここにいられないってようなことがあって、そういう時代だったらしいね。

それでその人はもう、ここにいられなくなって。それから山へ行っちゃったんだね。だけどその、山へ行ったときも、三人でその、作左衛門と久左衛門と久兵衛と三人で山へ行っちゃいけないっていう：昔は旧で言ったんだけど、十月の十七日に、山へ刈敷をとりに行くって行って、そして、もう荷ができたで帰ろうと言ってたら、その、久兵衛ってのが、もうできなくて帰れないって言って、見たら、角が地

に刺さってそれで連れて来ることができなんだって、結局二人は帰って来たんだけどね。

そういう、まあ、いうことを作ったのだが、山へそれで久兵衛はそれで山の方へ登っちまったって話があるし、するけど、そういうように作って、それで、あれでしようね、あの、言い逃れに、久兵衛はこの世にいないって、鬼になったとか、この世にいないとかっていうことで、久兵衛を隠しちゃったわけでしょうね、きつと、そうだと想うんですけどね。

それからまあ、久兵衛はうちを案じて、そのお話だけど、浅間の、浅間の方には、女の山の神って人があつて、その人たちのとこの仲間で、作ってやってたらしいけど。

その、山や登ってからは七ヶ村、七ヶ村の人が食料を運んでくれたとかいうけどね、その人の功績でというか、みんなの感謝の気持ちでね。

それでまあ、久兵衛はうちを心配したりして、夜

中に、あの、作付けの時期には夜中に来て、代をしたり田植えをしてくれたり、焚き物運んでくれたり、みんな朝起きてみりゃ、田が終わってたとか焚き物がどつさりあつたとかそういうことでみんな驚けていたんだね。

それであの久兵衛が屋根に登って煙出しから家のものはどんなこと、どんな風にしてるか見たくて、煙出して分かります？ 昔、火を焚いてね、こう屋根に煙出しがあつただよね、火を焚くから。それで、煙出しから覗いたら奥さんが、それを見て、

「あー怖い」

って言つて、そしたら、

「お前も怖いか、俺もここまで出てくるには怖いで、もうこれつきり来ねえべよ」

って、それつきり来なんだっていうけどね。それでその、稲を植えても久兵衛が唄った唄に

久兵衛の

植えたる稲は

中でんばらんで

外へ穂が出るな

って唄を唄って植えてった。そしたらやっぱ、その、役人が、毎年秋になると、検見って言って来て回るそうですね。その、検見で回る頃は中に穂が出てて、よそののは、穂が出てても久兵衛の植えた稲は、中で穂が出てあの、はらんでね、そして、外に穂が出ないわけ。いやこれはやっぱこいつはだめだわって、いうようにみてか<sup>(みせかけ)</sup>けてね、そして検見が済むと穂が出て稲が実ったら、ってそういう唄もあるっていいますけどね。

それで、この、いとに、殿様が、久兵衛の功績を讃<sup>たた</sup>えて、あの、六十石の免租地をくれたらしいんだね。それで、だけどまあうちは久兵衛のうちだけど、他

の衆がみんなで作ったでしょうけど、作左衛門とこのおばあ様がよく知っててね、話すんだけど、このおばあ様は今寝てるけどね。

私もそのおばあ様から聞いたんだけどね、まあ、うちのおばあさんたちからも聞いた話だけど、六十石の免租地をくれたけども、まあここは後家<sup>ごけ</sup>って女の人だわね、旦那様のない人を後家っていうんだけどね、後家だもんだで、そんなに田んぼも作れないし、あの（・・・聴き取れず・・・）はとれなんだってけど・・・みんなで耕してってことになったわけだね。それでその六十石の、その、殿様のくれたときの書き物とか、そういうものも、家にあるわけだけど、今はないだいな。

【採話者からの質問】

久兵衛さんに子供がいたとか？

【話者の回答】

ええあの、信太郎って子供がいたってことはいい

ますけどね。その本にもでてますけど、信太郎が山の神のお宮をこした。山の神のお宮を……。久兵衛は山の神になってね、その山の神のお宮それから今、まあ今でもそこにその山が、一反三畝だか、どのくらいあるかね、しつかり覚えがないけど一反三畝とか一反五畝ばかあるんですよね、今でも。それをまあ村にだして村で今管理してますけどね。

前には大きい木があつてここの、火の建を建てるとか、そのの木切つたり、そこに公民館建てる時に木を切つたりして、今大きい木ないけど、それで村の衆は毎年十月の、今は十一月ですよ、十七日に山の神のお祭りついでって、もう村中でも行かないけど、氏子総代二年番の衆と、そして有志がお祭りに行ってくるんですけどね。

そしてたまにはしたくて、会をしたり、やってみますけどね、そう、久兵衛のお祭りだね。そしてまあ村のために、村のたを思つて、殿様と口論になつち

やったもんでね。村の衆が、そんなに高い年貢を取り立てられたじゃ村の人が食べてくことができない、まけるって言う、まけられないって言うことで、そういうことになつちやったもんだで、まあ村中がそういうふうみんなその何というか、慈悲深いっていうかその人がね。村のためにそういうことになつちやったもんだで、山の神として祀つていたもんだね。

#### 【採話者からの質問】

旅人にも優しかつたとかいふ？

#### 【話者の回答】

久兵衛を慕ってきた人があるらしいんですね。あの六坊さつて、六部夫婦も来たが、その六坊夫婦は大岩にいるときにお堂があつて、その人つてなこともいいますけどね。そうしたり、この上の方だけど、あの、ひがわさんつて今いってますけどね。そこのご先祖も久兵衛を慕つて来て、そしてここにいた

ってこといいますがね。そして前はうちの墓に、この家のお墓があつたけど、今は自分のそばに持つていってお墓を作っておりますけど・・・

久兵衛が、今、庚申様って向こうにありますけど、久兵衛が氏神様として持つてきた庚申様と諏訪社、諏訪社も持つてきてね。諏訪社はこの、耕地整理のときだか何だか、いつだったかしっかり知らないけど、この林中はやしなかっていつでも今は、七じようかいだかあるけど、前は三じようかいからなかったけれどね、それで上の方の衆が、八幡様でその久兵衛の持つてきた氏神様が、（・・・聴き取れず・・・）そして今はその諏訪社と氏神様、あの、八幡様、一緒にして、合併して、向こうのお宮にありますけどね。それで自分のお宮っていうかねえ、それが、庚申様っていつであるんだけどね、そしてその、庚申様のそばに、あの、お堂があつてそのお堂にあの、六坊さんたちがいたようですけどね。

それで六坊田って田んぼもあつたりして、そういうわけで、あの、久兵衛も、久兵衛が山に行っちゃったし、そしてそのあとに、六坊さんが火事出してお堂が焼けちゃつてね。それでお堂は焼けちゃうし久兵衛はいないし、えー、まあ世もはかなんできてつてことでしょうが、それで、生きながら埋めてもらいたいつて頼んで生きながら埋めてもらつたつて。

それであの、鐘のなっているうちは生きてて、生きてると思つていてくれていたつて。そしたら、七日七晩とか鐘がなつたとかいうだけでも、それで鐘の音が絶えてつたつていうけど、それでその後、昔は・・・最近今あの構造改善でうんと地下水をこの下の方深く掘つたんでね、水出ないけどその、前はもう二尺も掘ると水が出るくらいなこんなあの、ところだったけど、だから深くは掘れなかつたでしょうけど・・・何尺に何尺ってたかね。六尺に九尺とか何とかの、こう、山を越してそこに久兵衛が久兵

衛じゃない六部がね、六坊二人を生きながらやって  
そうしたっていうけど、これは、しけて下へ掘る  
ことができないでただってということだと。

だけど、この構造改善でなくて、耕地整理が、何  
年にあったか、あすこに碑があるけどね、このまっ  
とおりのこのあのうちありますね、あの道の中腹の  
辺りに向こうへ下りてくと左手のところに碑がたた  
ってるけど、あの辺が、あの諏訪社のあったところ  
だっというけどね。

そこに碑があるけど開墾のときに六坊様の、六坊  
さんの骨を家のお墓のそばへ持ってきたらしいんだ  
ね、そして六部塚っていつて塚もあって、今うちの  
お墓の前にありますけど、あの、男の人は細長い  
でね、女の人はこうちよつと笠を被ったような  
だけどね。

【採話者からの質問】

林中はやしなかって地名は？

【話者の回答】

林の中だったんで、林中って付けたかもしれない  
ね、私の来た頃はね、この辺にも林がいっぱいあつ  
たしね。そしてもうその、百メートルくらい向こう  
は皆川まで松林だった。私はあの穂高の狐島きつねじまから来  
たんですけど、その狐島から私より、十くらい上の  
方かたが、少し向こうのところ、お嫁に来てましたけど  
ね、その方の家で雷が落ちて火事にあつたってこと  
を聞いて、そのときに私は、林中なんていうところ  
だっというで、林の中だで雷が落ちたかなって思  
いましたけどね、そのくらい、林ばかだったですね。

八面大王はちめん

(池田町・林中)

有明山ありあけの八面大王の話聞いて、聞いて覚えた。

しつかりも、そんなにしつかりも覚えてないだろうだけれども、八面大王の話、きみちゃん知ってるって言ったら、知らないって言うんで、してやろうかって、してやったけどね。

八面大王ってね、有明山に八面大王って者がいて、それで里へ出ては、あの、みんなを懲らしめていたんだね、まあ、桃太郎が鬼ヶ島に鬼退治に行ったようなもんで、それでその八面大王、まあ、困るけど誰も退治ができない。

できないで困っていたら、さあ、その名を知らないけど、なんて人だかね、そのなんて侍だか、上の侍が退治に来るってことを聞いてその退治をしたいけど、どうやって退治すりゃいいか途方にくれてたか、

なかなか退治ができないでたら、やぐらの矢助って人の夢枕(こしらえた)に立たって、三十三かな、三十三節のある、鷹の羽で(こしらえた)矢で射ると射殺せるという、夢枕に立ったって、それをまあどうやってこしらえればいかって思っていたが、えーいたが、その矢助って人はやっぱ、その有明うみよのやぐらのあつた辺りへ、もうまだ拓ひらけない頃でね、昔はまあ魚を獲ったり菜漬なづきけを漬物をとったりして町に売りに行つて暮らしをたててたんだね。

そしてその町へ、何か売りに行こうと思ったか山を下りてきたら、鷹がかすみに引つ掛かって困っていた。それで可哀そうになって、その鷹を放してやつたって自分が狩りで・・・狩人でありながら、何だけど、そしたらまあ鶴の恩返しみたいに娘に化けてきて、そしてあの、一夜を請うたでしょうね。

そしてあの、  
「何も食べるものもないし、布団もないし」

って言ったけど、

「どこでもいいから泊めてくれ」

って言う。で、泊めてやって、そしてそんないるうちに、その人は、

「私は行くところが無いので、ここに置いてくれ」

って言うって、まあちようど鶴の恩返しみたいにやっていると、

「その八面大王を射殺すのに鷹の羽の矢がなければ、三十三節の矢がなければ射殺すことができない」

って、どうすりゃいいかって悩んでたら、その娘が矢をこしてきてくれた。自分の羽をのいて、こしてきたでしょうね。

こしてきてくれて、それでまあ射ったら、八面大王も山にいられないで逃げて下ってきたわけで、行って耳塚で耳を落とされて、たて足、私、耳塚とたて足とどっちが上の方だか知らないけど、たて足で足を落とされて耳塚で耳を落とされて逃げ延びてい

って、そして狐島きつねしまの今のお宮のそばに大王様ってとこがありましたよね、その辺で白狐びやくこに化かした。

それで狐島ってところは、そこを大王様として祀まつってあのお宮がありましたかね、それで狐島のお宮もその白狐を・・・八面大王を祀まつったということになるけれども、白狐神社として今も（・・・聴き取れず・・・）としてあるけどね。

昔はその当時、青島村っていったけども、いまはその狐島になった、そんな話を私、小学校の二年だかになったとき、先生から聞いた話だけだね。

狐に化かされた話

（池田町・林中）

三、四十年前のことかねえ、この近所の方がね、

この川の向こうのところに葬式に呼ばれてったって、  
そしてあの、葬式のおみやげは、まあ油げとかね、そ  
ういうようなもの、お餅や油げをもらって来た。

そしたら狐に河原で、狐に化かされたってね、盗  
られちゃってね。どうしても、で、こっち来られない  
って、迷ったりして。そんな話を聞きましたけどね。

それだから、狐はいたんだわね、河原の・・・あそ  
この高瀬の河原の辺りの林の中にいたんでしよう。  
それで油げをもってあの河原を渡れねってことを聞  
きましたけどね。

泉小太郎

(池田町・林中)

この辺の一带が湖で（・・・聴き取れず・・・）泉小

太郎って人かいね、小太郎って人の母さんが龍りゅうだか  
でね、それでその龍のお母さんがここをこの湖水を  
断ち割って、そしてあの平地をこしてみんなの暮ら  
しのいいようにしてやりたいって言って、その子供、  
龍の子供が、泉小太郎って人かいね、その人、お前  
が私に乗れって言って、乗ってそして、岩を打ち破  
って、そして湖水の水を空かして、それが平地にな  
ったとかいうことだ。

こっちの山にはね、貝塚とか何とか、色々あるだ  
いね、舟着き場とか、あの一、舟を繫いだ松だとか  
ね、十日市・・・じゃないや、洪しづ田見たみ、中之郷とか・・・  
ね。明科線あかしなを下るところ、高いところに二本だか、  
大きい松の木があるっていうけどね、そこに石・・・  
今はきれいに石を積んだりしてこう、公園みたいな  
こうしてあるけど、そのすぐそばにスタンドのある  
ところ、その松の木も舟着き場とかいって舟を繫い  
だらしいですね。

だからやっぱ、ここは海っていうか、湖水っていうか、そういうところだったらしいですね。

## 雪形

(池田町・林中)

うん、山を見て種をまくね、それはあの、この向こうに見えるけどね。あの種まき爺さとかいっていうんだけどね、今、今もうそんなことなんてあの、ハウス使ったりして種まくもんでね、そんなこと関係なしに幾日にまいて幾日に、幾日間おくと植え付けになるとかね、日を数えてまくもんで、そんなことはないけど。

昔は八十八夜に種をまいたけど、八十八夜の前後になると向こうの北の山にね、おじいさんが種を

まいているように、こう、種をまいているように、雪がそういう形に融けてくる。

## 鬼の釜

(池田町・堀之内)

この家の後ろつかわの山の中に、『鬼の釜』っていうのがあるんだ。釜っていうのはいろいろとある。こういう洞穴みたいのものもあるし。ここにある石でなくて、花崗岩を使ってあるんだ。中山山脈では、こういう花崗岩はとれないわけだ。アルプスの方から相当大きな石を持ってきて作ったらしい。普通の者の力ではできなかつただろうね。

送り狼

(池田町・堀之内)

昔、この辺りには狼がいたって。町に行った人が帰る途中、夕方暗くなって、この辺りの狼が、後ろからついて来たって。

キセルをね、逆さに持ってね。振りかざしたらやっとなが逃げたね、やっとうちに帰ったって。

おばふところ

(池田町・堀之内)

田んぼにね、今のような道ではなくて、昔の道はね、堀割りってあがっていてね、堀のところにいるいろ名前が付いたんだ。

ここは、わりあい寒いところだに、あそこに入れば、北風がなくなるって。だから『おばふところ』っていうんだ。

雪形

(池田町・堀之内)

どこに何が出るか分からないけどね。白馬(岳)に馬が出たら代掻きしろかするって、また爺じいさんが出たら種まきをするって。(爺じいヶ岳がたけの種まき爺さん)

鬼の足跡

(池田町・堀之内)

有明うみよに、でえらぼっちの足跡がある。

種まき爺さん

(池田町・堀之内)

だいたい五月の二日か三日かその頃になるとあれが出るだ。昔のびくで種をまく。種まき爺さん、それで爺じいケ岳がたけっていうんだ。

それが出ると、昔は田んぼに種まいた。

仁科三湖にしなの主ぬし

(池田町・堀之内)

湖水があるだ。青木湖あおき、中綱湖なかつな、木崎湖きざき。青木湖の一番の主は牛だつて。中綱は鐘だつて。木崎はでかい鯉いだそうだ。

埋蔵金

(池田町・堀之内)

どこで調べたのか、文章に残っていたのか、池田の人で探した人がいた。島々しましま(南安曇郡安曇村字島々村)に、そういう話がある。

島々の入り口に佐々木だったか、佐々だったか知らねえけどあるっていう。

六部の話

(池田町・堀之内)

昔、あさぎどうそんという六部が来て、どうい  
うわけか生き埋めになった。

「鐘がなっている間は、生きていると思え」  
と言って埋められた。

鼠穴 ねずみあな

(池田町・堀之内)

松川村の鼠穴ってところに穴があるけど、善光寺  
に通じている洞穴だつて。

静御前の井戸

(池田町・堀之内)

源義経の静御前が来て、入浴したつていう井戸が  
広津ひろつにある。しぶあなつていつて、村の人は身体からだを  
洗つてはいけないところがある。

滝沢 たきざわ

(池田町・堀之内)

滝沢にうたやき権現つていうのがある。那智の滝  
と同じようなものがある。水が枯れてしまつてい  
けどね、掘つたら、はしりがあつて、それを日照りの  
ときに掘ると、必ず雨があつたつて。

滝沢部落にあつて、今はすり鉢の形になっている。  
滝沢というのは滝が流れていたから。

禁作

(池田町・堀之内)

胡麻ごまを作つてはいけない。この辺り全部そうだ。  
どこの部落でも、諏訪社であつても何であつても、  
胡麻は作つてはならない。御摩みまつていうのは熊野が  
やつたらしい。仁科にのつて主が、それが北条にやられ  
たもんで胡麻を作つてはいけない。

また、堀之内、正科しょうじな、宮本みやもと(大町市)では、葱ねぎを作  
つてはいけない。神主の禰宜ねぎかららしい。

塚穴

(池田町・堀之内)

塚穴つかあなつて安曇あづみのむらいしつて人の墓がある。昔  
は塚穴つかあなつていつて、鬼の釜かまなんていわなかつた。権  
現けん様さまの方は禊塚みそぎつかといふのがあつて、こつちは塚穴と  
いふ。

姫川

(池田町・堀之内)

姫川ひめがわつていうのは、川がわに建御名方命たけみなかたのみことの娘が飛び込  
んだところだ。それで姫川ひめがわといふ。

登波離橋①

(池田町・有明)

登波離橋ってあるんだけど、あの上に昔、お城があつてね。殿さんがいたのかな。その人に本妻と妾がいて、舞を舞ったときに、どっちかが恨んで踊りながら針を十針縫って崖に落ちてしまった。それで『登波離橋』っていう。

それで頭が二つある蛇が出るっていう。俺たちが子供の頃、出たなんて話した。

そう昔からいうね。

登波離橋②

(池田町・有明)

この道をしばらく上って行くと、登波離橋って橋がある。昔、そこにお城があつた。本妻と妾が相反していみ合っていたわけだ。それで突き落として殺そうとしたんだ。

それを相手は察知して、

「自分を突き落として殺すなら、相手も一緒に死にましよう」

それで相手の袂と自分の袂を十針縫って、それを縫い合わせたとは知らず、相手を落として自分も死んでしまった。それで十針縫ったから『とはり橋』っていう。

長者池

(池田町・有明)

登波離橋の道をしばらく下って行くと、長者池つてあるだ。ここに神様を祀って、本妻、妾を供養してるって。

中島の舟着き場

(池田町・有明)

中島だな、中島つてところに大きな檣けやきの木があつて、そこに舟を繋いでおいた。泉小太郎が渡つて水がなくなつた。

## 【補遺】

湖の伝説について

(池田町・中之郷)

ここが湖だったってことは伝説としてはあるね。伝説だろうという、ほんとに湖水だったっていう確かな証拠はないんだけどね。東の方の段丘のところまで湖水で、私の方も湖水だったということになってるけどね。

大町は七百メートル近いところにある、私の方の土地は五百五十メートルくらいのところになる。そしてどういふことになるかというね、うちの方の段丘が、向こうの方と同じに段丘になってるその段丘の上に、いわゆる湖うみが湖水こすいのようになっていて湖うみだったなら水につかってしまつて水の底になってしまふ。

山の上に舟の伝説がある。おそらく伝説であろう。

(泉小太郎は)開拓者の伝説でしょう。

地名の話

(池田町・中之郷)

米どころであつてね、非常に豊かであつたから、池田という名前の出た、もとの田んぼに関係があつたんじゃないかと思うね。仁科先生がどういふ風の話されたか知らないけど、おそらく池田十郎藤重の話から始まつたと思うよ。だからこの辺はね、いわゆる田んぼや渋田しぶた見みは、じくだみだという、そういうのと関係した地名はたくさんある。

木崎の湖水から、池から水が来てその水のおかげでできた田んぼ、池から引いてきて、田んぼがで

たから池田だと、こう言った人もある。一面の理はあるかもしれないね。

花見けみってのはね、洪田見しぶたみと同じで、じくじくしたそういう田んぼで、そういう場所は（・・・聴き取れず・・・）全然分らないのも、半在家はんざいけというおもしろい地名がある。在家といえ、だいたいお坊さんになってくる、お坊さんの俗人がいたんだろうといながら実際のこと何も分かっていない。

相道寺あいどうじも、相道寺というお寺のあったなんて記録は残っていない。

押しおし手というのがある、押し出すと書いてこれはあの東山から洪水のときに土砂が押し出されて集積層ができたとかね。

書上かきあげは、高瀬川にだいぶ近い場所であったから、土砂をかき上げて堤防を作ったできた集落で、中之郷は前科郷さきしなの中心であって名前だけが残った。上之郷も下之郷もあるはずだが、なくなってしまった。

鶉山うやまも中之郷と同じ一つの集落だったらしいが、なぜかは・・・お城があるお山が鶉山になったんじゃないか・・・鶉の方にあったとか、はっきりしない・・・鶉山氏がいたことになっているし・・・

（中之郷の方に）経塚けいづかといって、昔の修験者がお経を読んで土地のお守りした（・・・聴き取れず・・・）塚を建てると経塚けいづかといつて、経塚けいづかっていうのがある。中に壺かがあつてね、お経を焼いた粉がある。六部を殺したつてことはあるのかね、殺したつてことは、むしろもう少し南の方になるのではないかね。

林中はやしなかなんてのも、土地の、林の中そのものだよ。久兵衛が出てきたつてもとは、上の方の山の裾に、しゃむ（社司のことか？）じつてのがあがるが、開拓に（・・・聴き取れず・・・）は石の神様らしい。昔の神様には石を、しゃむ（ミシヤグジ信仰？）じつていう神様が関係あるのかな、石の神様らしい、昔の神様の場所は、ご神体に石だけを祀つてある神様があつて、石を祀つてあるのは一番古い

神様で、開拓の、この辺りでは、特に、川と関係のある神様が、(社宮司という神?)しゃぐうじで、林中のついでにたまたまでただけどね、もとは、しゃぐじの方から来た。

でえらぼっち

(池田町・中之郷)

でえらぼちつてのは、これは方々ほうぼうにあるよね。おそらくもとは、平らな盆地のことを、それは、みんな巨人伝説と巨人の足跡だと・・・この頃だと恐竜の足跡が出てきたなんていうものじゃないか、昔の、山の中の平らな場所ってのは、多くそういう伝説があつて・・・

ここは中島城の裏側のところの、そこは知ってるかい。ちよつとした池みたいなのが昔あつて、平

つたいところが、あんまり広いところじゃないが、小さい田んぼに・・・たかぼちつてのは高いところで、でいだらぼちつてのは低いところだね。方々にあるんだよね。

じいがたけ爺ヶ岳の雪形

(池田町・日影)

稲の種をまいているときに、種まき爺というのが出てくる。安曇平に行くと、八十八夜とか何とかを目安にしていたのと同時に、雪が消える状態を見たんだらうね。

御岳おんたけの行者 (再話)

(池田町・会染法道)

御岳山に御岳の行者がお参りをする。六根清浄と言つて登る。唱え言をしてもらつて山の中腹が危ないとか言つと、教えてくれる。

火祭りといつて、薪持ってきて火がぼんぼん燃える頃、火渡りといつて渡る。炭の上を渡つて戻つてくるときに足がみんな焼いてしまう。

滝があつて、水を浴びる。唱え言をすると、滝が頭の上で二つに割れる。白紙を持って来て唱え言をすると、離れなくなつて病気が治る。

御岳の行者というのは、確かに山の神秘的なものだ。

狐火 (再話)

(池田町・堀ノ内)

狐火は狐の嫁入り。

夜、提灯ちようちんをつけて川の土手や山際に出る。どこから出てどこへ行くのか分からない。

町に行つて帰つてくるときに、油げや魚を盗られたりする。段丘のへんに来ると、人が後ろで呼ぶよな気がする。狐につままれた。翌朝、狐の足跡があつた。

あそこへ行けば狐がいて、狐がしつぽを揺らすたび、ふらふらして遊ぶ人がいた。

つばめと雀の話 (再話)

(池田町・堀越)

つばめと雀は兄弟だった。親が危篤のとき、雀は大急ぎで帰ったので、親の死に目に会えたが、つばめはきれいにお化粧してから行ったので会えなかった。

それから雀は穀物を食べることを許され、つばめは泥で巣を作り、虫を食べなくてはならなくなった。

狐に化かされない方法

(池田町・平畑)

「しっぽの先が苦いなあ」  
「さて、一服しようかなあ」

「わらじの紐が解けたわなあ」  
と言うと、憑いていた狐が逃げる。

中萱嘉助の話

(池田町・中島)

佐倉宗五郎と同じようなケースで実際にあった。各地区の庄屋と中萱嘉助(多田加助のこと)がたつて。税金が重いから減らしてもらおうと思つてね。首とられるのを覚悟して、熊野神社でお祈りして、飲んで。

桶に糲もみを入れるのは通ったけど、減租はだめで、男の子は全部、出川いでがわの河原で打ち首になった。丸ノ内中学を建てるとき、頭の骨が出てきて・・・  
怪我するから、祟りだと言っているうちに坊様を頼んで、やった。

【補足】

一六八六年、安曇郡の中萱村なかかやの多田加助を中心として起きた百姓一揆じょうききょう（貞享騒動）のこと。

安曇族あづみのこと （再話）

（池田町・池田）

仁科氏にしなのこと （再話）

（池田町・池田）

大町を中心にして、この辺り（池田）を仁科といた。四百年にわたる領主だった。（前期平姓仁科）↓阿部姓仁科↓源姓仁科↓後期平姓仁科↓武田姓仁科（二十一年くらい。仁科守信、信濃国鷹塔の城主になっていた）

松本市の島立しまだちから塩尻しほじりの方までの道に仁科街道、鎖川くさりの橋に仁科橋というのがあった。

皇室の内膳職として日本書紀などに載っているのは、こざとへんに曇、阿曇で、権力者であったのに、この山国へ何故追われて来たのか分からない。しかし、確かにいた。正倉院御物に、信濃国安曇郡前科さきしな郷の麻の布と袴がある。前科郷はどこであるのかというと、およそ、池田町の南辺りであろう。ここに、現在安曇姓は続いていない。行先不明になっている。阿曇という漢字の違いについても分かっていない。

林中久兵衛の話 (再話)

(池田町・池田)

林中はやしなかを、土地が痩せているにも関わらず、洪田見しぶたみと同様に検地したから、(久兵衛は)役人を殴って逃げた。馬羅尾ばらおに行った。

その後は不思議なことが起こった。一晩のうちに稲が刈つてあるというような。村人がやったとか、天狗だとか、久兵衛がやったとか、いう。

常光院のお薬師様 (再話)

(池田町・池田)

夢枕に、お薬師様が出てきて、

「もしやのことがあれば、わが身を。できなければ手だけでも」

と。安政三年の大火事おほいのとき、身体を取り出せず、やっと手だけを引き抜いて取り出した。

この手は今、浄念寺じやうねんじに祀られている。

ご神木の話 (再話)

(池田町・池田)

この裏のお稲荷様いなごりさまでお相撲を取った。春と秋と。木を切った話がある。昔そこに大きい木があつて、売ったらバチがあつた、という。犀川さいがわで流してやったんだけど山清路さんせいじ辺りで、筏いかだがひっくり返って、三人のうち二人が死んだ。

狐 (再話)

(池田町・花見)

一服すれば、迷わず帰ってくる。化かされたと思  
ったら、一服すれば良い。

狐 (再話)

(池田町・相道寺)

狐に化かされて、肥溜こえだめに入っていたとか。今は馬  
鹿にされるから言わなくなっている。山道を歩いて  
ると、木を切る音がした。ザッコザッコとか、いつて  
て。山鳥の羽がすれて静電気みたいになったのかも  
しれない。

狐火といって、火の玉がばらばらになったり一列  
になったりした。

雪女 (再話)

(採話地区名不明)

猟師の二人が猟に出かけて吹雪にあった。山小屋  
で寝たがひとり眠れぬまま、夜が更けた。ふと気  
がつくとその枕元に音もなく美しい女の人立って  
いてささやいた。

「私のことを誰にも話してはいけません。話すと命  
がなくなります」

それだけ言うと、女は吹雪の外に消えてしまった。

翌年のある吹雪の夜、道に迷った美しい女が、猟師のところへ宿を求めた。女はそのまま住みついて、猟師の妻となり、五人の子を産んだ。

ある雪の夜、昔のことを思い出して、妻に話してしまつた。すると妻は、

「とうとう約束を破りましたね。あなたを本当は殺さなくてはならないのだけど、それもできません。

今日限りでお別れします」

と言うと、煙のように消えてしまつた。

有明山ありあけ（再話）

（採話地区名不明）

有明山は中鵜なかつから見ると富士山のような形をしており、信濃富士といわれている。昔、この山に

天照大神あまてらすおおかみが怒って隠れてしまつた。そのため辺りが暗くなり、この山の戸はビクともしない。そこで山の前で酒宴をして、何ごとと思ひ、戸を少し開けたところを力持ちの神が力づくで開けて、再び世が明るくなつた。そのため有明山というようになった。

また、夜になるとぼんやり明るく見えるので、有明山という人もいる。

このとき、開けた戸を再び隠れられると困るといふので、隠してしまつた。これが戸隠山である。

池田町の民話(話者名と題名)

那須正一郎さんの家で (池田町・内鎌ないがま)

登波離橋 . . . . . 一一  
 継子落とし . . . . . 一一

田中平八郎 (池田町・内鎌)

戸隠の水 . . . . . 一二  
 丹波様の道 . . . . . 一三

中沢清寿 (池田町・堀越ほりこし)

山の神様の背くらべ . . . . . 一三  
 埋蔵金伝説 . . . . . 一五  
 泣き岩 . . . . . 一五

おはぐろばち . . . . . 一五  
 沼の伝説 . . . . . 一七

河童の話 . . . . . 一七  
 狐に化かされた話 . . . . . 一八

つばめと雀の話 . . . . . 八三

丸山義幸 (池田町・平畑たいらばたけ)

狐火 . . . . . 一九

狐に化かされた話 . . . . . 一九

狐に化かされない方法 . . . . . 八三

吉沢長男 (池田町・北梅つがのおの尾)

狐火 . . . . . 二〇

泉小太郎 . . . . . 二〇

中山今朝治 (池田町・北梅の尾)

船をつないだ松の木 . . . . . 二〇

狐に化かされた話① . . . . . 二一

狐に化かされた話② . . . . . 二二

ムジナ . . . . . 二三

山犬 . . . . . 二三

中山くら子 (池田町・北梅の尾)

ずいとんぼう . . . . . 二四

田中良子 (池田町・中之郷なかのこう)

ムジナ . . . . . 二四

狐に化かされた話	二四
馬鹿むこ	二五
笠地蔵	二六
三枚の御札	二七
滝沢文夫 (池田町・中之郷)	
落人伝説	三一
長福寺の話	三二
湖の伝説について	七九
地名の話	七九
でえらぼつち	八一
山崎 貢 (池田町・荻 <sup>おぎ</sup> )	
狐火	三二
狐に化かされた話①	三三
狐に化かされた話②	三三
馬鹿むこ	三三
食わず女房	三四
猿とカニ	三六

六地蔵の由来	三八
狐に化かされた話③	三九
秋葉神社の話	四二
小林夏枝 (池田町・六地蔵 <sup>ろくじぞう</sup> )	
餓鬼岳の金貨	四三
四人峠	四四
六地蔵	四四
こたつ	四五
継子落とし	四五
登波離橋	四六
箸塚伝説	四六
落人伝説	五〇
狐	五一
山崎 粲 <sup>あきら</sup> (池田町・日影 <sup>ひかげ</sup> )	
小太郎伝説	五四
狐火	五四
ふくろう・家の主	五五



静御前の井戸	．．．．．	七五
滝沢	．．．．．	七五
禁作	．．．．．	七六
塚穴	．．．．．	七六
姫川	．．．．．	七六
話者名不明 (池田町・有明) <small>うみよ</small>	．．．．．	七六
登波離橋①	．．．．．	七七
藤松正志 (池田町・有明)	．．．．．	七七
登波離橋②	．．．．．	七七
長者池	．．．．．	七八
中島の舟着き場	．．．．．	七八
牛越進 (池田町・中島)	．．．．．	七八
中萱嘉助の話	．．．．．	八三
仁科宗一郎 (池田町・池田)	．．．．．	八三
仁科氏のこと	．．．．．	八四
安曇族のこと	．．．．．	八四
林中久兵衛の話	．．．．．	八五

常光院のお薬師様	．．．．．	八五
牧寄さんの家で (池田町・池田)	．．．．．	八五
ご神木の話	．．．．．	八五
宮嶋亀鶴 (池田町・花見) <small>けみ</small>	．．．．．	八五
狐	．．．．．	八六
宮沢菊男 (池田町・相道寺) <small>あいどうじ</small>	．．．．．	八六
狐	．．．．．	八六
話者名不明 (採話地区名不明)	．．．．．	八六
雪女	．．．．．	八六
有明山	．．．．．	八七

## 民話探訪雑感

### 【みちくさ その一】

夏のことだった。すごい暑い日で、じいっとして  
いるだけで汗の出ってくる、そんな日だった。

私ともう一人、女子二人、ある調査で陸郷りくごうの八代やしろ  
と三郷さんごうという集落に行くことになっていた。池田町  
の町はずれで本当に山ばかりという所だ。行きは車  
に乗せてきてもらった。つい先日、崖崩れがあった  
とかで、道が遮断されていて、よく地図では分から  
なかったが、八代のこの辺りだろうということ、  
車から降ろされた。午前十時頃だったかな、女子二  
人で相談して、先の方にある三郷に行ってから、八  
代のここに下りてくることにした。

行く道は一本の道路で、下る坂道であった。ちょ  
っと行くと『明月院』とか書かれた石の柱が建って

いた。七、八分歩くと二本道に出た。そこには標識  
が立っていて、三郷は右の道を指していた。そこか  
らが大変。急な上り坂になって、道は狭く、悪くな  
った。

息を切らして登って行くと、一軒の家が現れた。  
表札でその家の名前を地図で確かめて、今まで来  
た道が正しいことを確認した。もう少し行くと分か  
れ道があつて、左の道は途中で切れているから右を  
行こう。地図の道をたどりながら山道を歩いていっ  
た。もうそろそろ家があるはずだ、と、地図を頼りに  
進んで行った。

家があった。

「三郷に着いたぞ。地図によると、ここは〇〇さん  
のうちだよ。じゃあ、あそこの家から調査！」

二人は大分疲れていたので、早く休みたかった。  
十一時頃だったろう。

「こんにちはー」

車椅子に乗ったおばあさんが出てきた。いつもの調査のように、昔のことを聞いていた。集落の名の由来でも聞こうと、

「ここは三郷という所ですよね」

「いや、違うよ。ここは八代だよ」

「ガン！ 八代だって？ 思わず、

「本当ですか」

と、聞いてしまったが、住んでいる人が間違えうわけがない。この家でヤクルトをごちそうになったが、思うようにのどに入らない。私達、いったいどうしたのだろう・・・

おばあさんにお礼を言って外に出た。表札を見ると確かにここは八代らしい。では、今まで私達の歩いて来た道はどうなるんだ。きっと、車で降ろされた所がともと違っていたんだ。だから八代に来ちやっただと二人は思った。

八代での調査を終え、新たに三郷に向けて出発した。午後一時だった。三郷の方向は、人に聞いたのでそちらに行けばよい。と、突然『明月院』の文字が・・・

何とそこには、朝見た石の柱が建っていた。

「ウソツッ！」

一瞬、何が何だか分からなくなってしまった。まさかキツネに化かされたのではあるまいな。

結局、朝通った道をまた通って、例の標識に出た。標識が間違っているのでは、と疑ってみたが、坂道を登って出てくる一軒家は、地図上間違いない。そして分かれ道。

地図では、左の道は途中で切れている。ここが曲者くせものである。さつきは右に行った。今度は左に行ってみるか。私達は、左の道を歩いていった。その道は切れることなく三郷へと続いていた。

では、私たちは朝、どの道を歩いていたのだろうか。地図には、あの一軒家からも、あの分かれ道からも八代へぬける道はないのね。山の中の出来事だから、キツネの仕業かもしれない。

後で知ったことだが、私達の持っていた地図は航空写真で作るとかで、木々で見えない道は地図に載らないのだそうだ・・・とき。

### 【みちくさ その二】

高みへ登って、『継子<sup>まご</sup>落とし』を見てきた。前の地震でくずれが大きくなって、近づくのも怖いような崖になっていたが、まわりは、見わたすかぎり緑の木々で、何故か、ほつ、としたりしていた。道は目の

前にずっと続いていたが、行ってみることはできなかった。樹があつて守られていた。

落とされた子は、鳥にでもなったのだろうか。桑の葉が黄色に近づいていた。

### 【みちくさ その三】

第一回目の追調査は九月十四日から十六日の三日間でした。十三日の夜行で発ち、翌朝、池田町に着くと、晴れていて、池田小学校の運動会がとり行われている様子でした。

挨拶にお伺いした池田町公民館にたまたまいらっしやったのが、滝沢文夫さんでして、公民館でお話を伺ってしまいました。あとで録音したテープをきき直してみると、公民館の活動状況がとても良く聴

けて懐かしい限りでした。人の出入り等、公民館の方々、特に館長さんの声です。それにしても、（・・・聴き取れず・・・）だらけですみません。

【みちくさ その四】

登波離橋を詠った歌二首

鶴にのる おもいや春の 雲の上

（花ノ本聴秋）

足もとへ 靄吹きつけて ほととぎす

（白鷺）

高かったし、狭かったし、で怖いところだった。今はちやんとしたかんじの橋になって、怖くて渡れない、ということはない。

しかし、橋のへりからのぞきこんだりすると・・・ここから落ちたら途中、いったい何が見えるのか、少しばかり興味があるような。

【みちくさ その五】

七月三十一日、平出（地区）からゆっくりと下へおりて行った。町へ着いたら、かき氷を食べよう。

暑い日射しの中をゆっくりとおりにいった。難しいことを考える勇気がなかった。かき氷、というのが食べたくなかったのは、単に、暑かったからで、夜

中に突然、いなりずしが食べたくなるのとは、質がちがっている。

しかし、かき氷でなくても良かったのだろうか。

実は、私達二人は、吾妻町まできたときにすぐに自販機でジュースを買っていた。ここで、のどの渇きをいやしてしまったては『暑い』の要素に傷がついてしまうはずだ。しかし、私達のかき氷への情熱は少しもゆるがなかった。

恋をしているのかも……しれない（かき氷に）。

## 編集後記

この民話集を作成するために、録音テープから文字へ直す作業をしていると、そのお話を語ってくださった方々、一人一人の顔が浮かんできます。

「この話のときは、向こうの山を指しながら語ってくださいましたっけ・・・」

「この話はお茶をごちそうになりながら伺った」など、私たちにとって何事にもかえがたいものばかりです。

しかし、文字では話し言葉を完全に表すことができません。文字には声のように表情がありません。話をしてくださった方々の声の表情やたくみな間など、紙面ではうまく表すことができないのはもどかしい限りです。自分達の力不足を痛感しました。

そのような中で、ようやくこの民話集はできました。作成にご協力くださったすべての方、池田町の方々へ、心より御礼申し上げます。

千葉大学日本文化研究会民話分科会名簿

(一九八五年十一月で表記)

教育学部 四年 石川千春

文学部 四年 栗原良恵

教育学部 三年 宮木裕一

ほか三名

『池田町の民話』

(長野県北安曇郡池田町の民話)

【発行者】 千葉大学日本文化研究会民話分科会

【発行日】 一九八五(昭和六十)年十一月一日

リポジトリ公開用覆刻版

『池田町の民話』

(長野県北安曇郡池田町の民話)

【覆刻版発行者】

千葉大学(旧) 日本文化研究会民俗資料編纂室  
代表 日本文化研究会初代会長 加部恒雄

【覆刻版発行日】 二〇二〇年三月三日

<https://doi.org/10.20776/106363>